

第六章

ア マ テ ラ ス オ オ ミ カ ミ へ天照大神へ説の検討

天の戸の あくる光も のどかにて

神代かわらぬ はるは来にけり

〔桃園天皇御製〕

天地の 初の時 ひさかたの 天の河原に
八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして 神計り
はかりし時に 天照らす 日女の尊・・・

〔柿本人麻呂(万葉集167)〕

「天地がはじめて出来て多くの神々が
集まって相談なさったとき、天照大神
は・・・」

ひさかたの 天の戸開き 高千穂の 岳に天降りし
皇祖の 神の御代より 梶弓を 手握り持たし
真鹿児矢を 手挟み添えて・・・

〔大伴家持(万葉集4465)〕

「わが大伴一族は天の岩屋を開いて高
千穂の峰に天降られた皇祖瓊瓊杵尊の
時代から、梶の木の手を手に握り、鹿
を射る矢を手挟んで添えて・・・。
(神武前から大和朝廷につかえてきた
誇りを持てと、大伴一族を励ました歌)」

六・一

〈天照大神〉と「天の岩屋」

◎教科書が教えない日本神話

いよいよこの章から、第二章で略述した〈卑彌呼〉の正体についてのいくつかの意見を、くわしく説明することにする。

本章の対象は、第二・一節で記した「天照大神」説である。

一般に、

「〈卑彌呼〉」Ⅱ 〈天照大神〉説

は、

「〈邪馬台国〉九州説」

——と結びついており、それはまた神武東征神話とも結びつくことが多い。

ロマンにあふれた説であり、たいへんポピュラーである。

大量に自費出版されているアマチュア研究者の主張も多くはこの説になっているし、この説にもとづく小説もたくさんある。

〈天照大神〉説について考えるには、とにかくにも〈天照大神〉の神話や神武天皇の東征伝説を知らねばならないが、いまは学校でほとんど教えなくなっただけらしい。

アメリカの義務教育の教科書には、日本神話が、日本の教科書よりもくわしく書かれており、天孫降臨、神武東征、「三種の神器」などもちゃんと載っているといわれる。

こういうことだといまに、日本の若者がアメリカの若者に日本神話を教えてもらおうという情けない時代が来てしまうであろう。

——というわけで、まず『日本書紀』をたどる形で、神武天皇即位までの日本神話の概要を記してみよう。

ただし神話の解釈については、議論が多すぎるし、頁も超過してしまうので、ここでは〈卑彌呼〉問題に直接関係する事項にかぎることにする。

また『日本書紀』は正文のほかに「一書に曰く」として、多くの異説や補足を記している。また『古事記』の方がくわしい部分もある。

以下では、『日本書紀』の正文を主としながら、それ以外の補足も随時記すことにする。

文中「一書では」という注書きは、『日本書紀』のなかの異説や補足のことである。

（神の名にはワープロに標準装備されていない漢字があるので、一部便法を用いた。正しくは『日本書紀』自体を見ていただきたい）

＊

神代の物語（１）

——天地開闢から天の岩屋まで——

△天地開闢カイビヤクと神世七代

世界の初めは陰陽も天地もない混沌とした状態だったが、澄んで明るい部分が天となり、重い部分が地となった。

その天地のなかに、

國常立尊クニノトコタチ

國狹槌尊クニノサツチ

豐斟渟尊トヨクムヌ

——という三柱の男神が生まれた。

（第二章に記したようにルビのミコトは略す）

そのあと、以下の四組八柱の男女の神々が生まれた。

泥土煮尊ウヒジニ・沙土煮尊スヒジニ

大戸之道尊オオトノジ・大苦邊尊オオトマベ

面足尊オモダル・惶根尊カシコネ

伊弉諾尊イザナギ・伊弉冉尊イザナミ

國常立尊からここまですべてを神世七代という。

『古事記』では、この神世七代のさらに前に、

天之御中主神アメノミナカヌシノカミ

高皇產靈神タカミムスビノカミ

神皇產靈神カミムスビノカミ

宇摩志阿斯訶備比古遲神ウマシアシカビヒコチノカミ

アメノトコタチノカミ
天之常立神

——の五柱の神がいたが、すぐに身を隠したとされている。

△初めての結婚と国土の誕生

天と地を結ぶ天^{アマノウキハシ}浮橋の上に伊弉諾尊^{イザナギ}と伊弉冉尊^{イザナミ}が立つて、矛^{ホコ}で下界の海を探ると、その矛から落ちた潮が固まってオノコロジマという島になった。

その島に降り立った二神は、そこにある大きな神聖な柱をまわって結婚し、日本列島を生んだ。

巨大な柱は古くから神が宿るとされ、神社の鳥居の源といわれている。

いまでも古い神社には横柱のない二本の柱に注連縄^{シメナワ}をはっただけの鳥居があるし、また諏訪大社のように御柱祭がなされる神社もある。

伊弉諾尊・伊弉冉尊がこのとき生んだ島は八つだったので日本列島を大八洲^{オオヤシマ}という。

これは日本が数多くの島から成っていることを、古代のひとたちがすでに知っていたことをあらわしている。

つぎに二神は、海・川・山・木・草などを生んだ。

アメテラスオオミカミ
△〈天照大神〉の誕生

伊弉諾尊^{イザナギ}・伊弉冉尊^{イザナミ}はつぎに、〈日神^{ヒノカミ}〉を生んだ。

これを〈大日靈女貴^{オオヒルメノムチ}〉といい、一書では〈天照大神^{アマテラスオオミカミ}〉といい、さらに一書では〈天照大日靈女尊^{アマテラスオオヒルメノミコト}〉といい、さらに『古事記』では〈天照大御神^{アマテラスオオミカミ}〉とも書いて尊称しているが、この御子は明るく美しく、天地の隅々までが輝いた。

太陽神の誕生である。

喜んだ二神は、この御子を天に送った。

つぎに月神を生んだ。一書では月弓尊^{ツクユミ}、月夜見尊^{ツクヨミ}などと尊称している。

つぎに素戔嗚尊^{スサノオ}を生んだが、この尊^{ミコト}は勇ましく強く過酷で泣くことを仕事にしていた。そのため国土が荒れてしまった。

そこで伊弉諾尊と伊弉冉尊は、

「遠く根の国に行きなさい」

と、追放なされた。

根の国とは、地底の異境のことである。

△〈天照大神〉と素戔嗚尊^{スサノオ}の軋轢^{アツレキ}

素戔鳴尊は根の国に行く前に高天原の姉に会いたいといつて、海を揺り動かし山を鳴り響かせて、荒々しい態度で天に昇った。

高天原とは、〈天照大神〉が統率する天の世界で、この神話が史実の反映だとすれば、九州の一部——たぶん北部——ではないかとされている。

〈天照大神〉は武装してむかえて——天の川を挟んで——詰問し、それに応えて素戔鳴尊は、邪心のない証拠を示すために、誓約をして子を産むことにしようと提案した。

そこで〈天照大神〉は素戔鳴尊の剣をかみ砕いて吹き捨てて、三柱の女神を生んだ。この女神たちは九州の筑紫に祀られて、朝鮮に渡る人たちの守護神となった。有名な宗像大社の祭神などである。

素戔鳴尊は〈天照大神〉が身につけていた宝玉（瓊）をかみ砕いて五柱の男神を生んだ。この男神たちは、出雲・河内・山代などの豪族の祖、また葬儀や造墳を役目とする土師連の祖、とされている。

そして〈天照大神〉は提案して、女神と男神を交換する。なにやら暗示的な交換である。

△「天の岩屋」事件

軋轢が解けたようにみえたが、素戔鳴尊は高天原に留まったまま乱暴を続け、田畑や御殿を荒らしまわった末、〈天照大神〉が機織りをしているときに、馬の皮を剥いで投げ込んだ。

〈天照大神〉は驚いて機織りの梭（横糸を通す道具）で身体を突いて怪我をしてしまった。

一書では〈天照大神〉の妹の稚日女尊がこういうめにあつて死んでしまうし、また『古事記』では機織の姫が梭で陰部を突いて死んでしまうことになっている。

尖ったもので高貴な女性が下腹部を突かれて死んでしまう話は、各所にあり、〈卑彌呼〉の死と関係が深いという説もある。

さて〈天照大神〉は立腹して天の岩屋（天石窟）に隠れて、岩戸を閉じてしまう。そのため国中が闇となり昼がなくなってしまった。

困った神々は天の川に集まって相談して、智慧のある神がつぎの作戦をたてて実行した。

不老長寿の国の鶏を集めて長鳴きをさせた。

力のある手力雄神を岩戸のそばに隠れさせた。

祭祀担当氏族の中臣連の先祖（藤原氏の先祖）や祭祀
実務担当氏族の忌部の先祖が天香具山の聖木・榊を抜い
てきて、その上の枝に八坂瓊の五百箇御統（大きな勾玉
をたくさん連ねた飾りで後の三種の神器のひとつ）をか
け、中間の枝に八咫鏡（大きな銅鏡で後の三種の神器の
ひとつ）をかけ、そして下の枝に御幣の一種の青和幣・
白和幣をかけて、全員で祈った。

勾玉をつくったのは玉作部の先祖であり、鏡をつくつ
たのは鏡作部の先祖であり、そして和幣をつくったのは
忌部の先祖である——とされている。

（注・・・このときの、榊に勾玉と鏡をかけた神木の模
型は、一般の家庭でも見ることができる。神棚にかなら
ずそなえられている向かって右側の真榊がそれである。
左側の真榊には剣がかけられているが、これは素戔鳴尊
が出雲で発見した「神剣」である）

それから鎮魂の舞楽に奉仕する猿女君の先祖の天鈿女
命が巧みに演技し、神憑りになって踊りくるった。

この騒ぎを聞いて、岩屋のなかの（天照大神）は、自
分が隠れて世が暗くなつたのに、どうして喜んでいるの

かと不思議に思つて、岩戸をすこしだけ開けて外をうか
がった。

そのとき手力雄神はすぐに岩戸をこじあけて（天照大
神）の手をとつてそとにお出しし、ついで中臣と忌部が
注連縄をはって境界をつくり、二度と入らないで下さい
——と請い願った。

そして神々は素戔鳴尊から賠償を徴収し、高天原から
追放した。

＊

これが有名な「天の岩屋伝説」で、第二章の図2・1
は、昔の歴史の教科書にあったこの物語の挿絵である。
この岩屋伝説と（卑彌呼）とのつながりの推理につい
ては、後述する。

六・二

出雲の国譲りと天孫降臨

神代の物語（2）

——八岐大蛇から神武天皇御降誕まで——

△八岐大蛇と天叢雲劍

素戔嗚尊スサノオが高天原タカマガハラから追放されて出雲国イズモに降りてみたところ、老夫婦が奇稻田姫クシイナダヒメという名の娘を間にして泣いていた。

たずねると、八つの頭と八つの尾を持つ八岐大蛇ヤマタノオロチが娘をつぎつぎに飲み込み、のこるこの娘もまもなく食べられたしまうと訴えた。

素戔嗚尊は酒を大蛇に飲ませ、酔って眠ったところを自慢の十握劍トツカツルギ（握り拳が十個の寸法／大きな劍）で寸断

した。

そのとき尾を切ろうとすると劍の刃がすこしかけてしまった。割いてみるとそこに立派な劍があった。これが天叢雲劍アマノムラクモノツルギで、のちに日本武尊ヤマトタケルが使って草薙劍クサナギノツルギと呼ばれるようになり、現在は名古屋の熱田神宮アツタに御祭神として奉斎されている神劍である。

古代の劍は諸刃の直刀で、刃の部分の形状は鉾ホコとあまりかわらない。材質はかなり古くから鉄が使われていたが、銅製の可能性もある。

素戔嗚尊は「これは靈劍だ」として、（天照大神アマテラスオオミカミ）に献上した。これが「三種の神器ジンギ」の最後のひとつである。

それから素戔嗚尊は助けた娘の奇稻田姫クシイナダヒメと結婚するための宮殿を、出雲の清々しい場所——現在の島根県大原郡大東町須賀スガ——に建てて、第一章のトビラにも掲載したつぎの歌を詠んだ。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに

八重垣つくる その八重垣を

これは短歌の先祖とされる有名な歌だが、素戔嗚尊の

ような乱暴者がこういう優美な歌をつくるのが、日本神話の真骨頂である。

奇稻田姫という名は、神聖な稻田という意味である。

また八岐大蛇とは、一説では、河川の氾濫であり、したがってこの説話は、稲田が河川の氾濫によって崩壊するのを、水利工事の知識によって救った史実をあらわしている——とされている。

興味ぶかいのは、のちの第十二代景行天皇の皇子の英雄・日本武尊が、この同じ剣を借り受けて東国に遠征した説話もまた、稲作技術の伝播をあらわす——といわれていることである。

さて、こうしてめでたく奇稻田姫と結婚した素戔鳴尊は、御子〈大己貴神〉をおつくりになった。

そして宮殿の管理者を定めて、ご自身は約束通り根の国に去っていかれた。

この〈大己貴神〉は、『日本書紀』の本文では、のちの〈大國主神〉の親または先祖であるが、『日本書紀』中の一書や『古事記』では六代目の子孫で〈大國主神〉と同神ということになっている。

〈大己貴神〉とは土地の偉大な貴い神といった意味であ

り、〈大國主神〉とは国の偉大な首長という意味なので、ほぼ同じ含意の神名である。したがって同一神（または同一の豪族）としてさしつかえないであろう。

『日本書紀』のこの部分には、朝鮮に行つて戻ってくる話や〈大和〉の〈三輪山〉の〈大物主神〉との関係など、いくつもの長い異説が載せられていて、それぞれ興味ぶかいのだが、ここでは割愛する。

〈大物主神〉との関係については、〈倭迹迹日百襲姫命〉についての章で説明する。

『古事記』のこの部分には、有名な因幡の白兔の説話などがあるが、それも割愛する。

△出雲の国譲り

いっぽう高天原の〈天照大神〉は、素戔鳴尊との対決のなかで、尊が大神の宝玉を砕いて生んだ男神五柱を自身の御子にしたのだが、その長男である天忍穗耳尊が高皇産靈尊の姫と結婚して、瓊瓊杵尊を生んだ。

高皇産靈とは、高所から降臨する神聖な生成靈力の意味で、『日本書紀』本文ではここでとつぜん出てくるのだが、『古事記』では世界誕生の最初期からおられる神であ

る。つまり神世七代の前の神である。

この高皇産靈尊は瓊瓊杵尊を寵愛して、葦原中国^{アシハラノナカツクニ}

——字義どおりには葦の原のなかの国だが、ここでは天と地底の間の国の意味でつまりは日本の大地——の王にしようとしていたが、土地がたいへん乱れている様子なので、平定するために、男神五柱の二番目の天穗日命^{アマノホヒ}を派遣した。

ところがこの神は出雲の〈大己貴神〉^{オオナムチ}に籠絡されて報告もせず戻ってこなかった。

またそのあと、何柱もの神を送ったが、うまくいかなかった。

そこでさらに高皇産靈尊^{タカミムスビ}は神々と相談して、剛勇できこえる経津主神^{フツヌシ}に武甕槌神^{タケミカヅチ}をつき添わせて葦原中国に派遣した。

この二神は、〈大己貴神〉のいる出雲に出向いて、剣の切っ先の上にあぐらをかくという凄惨な迫力で談判したところ、〈大己貴神〉は息子の事代主神^{コトシロヌシノカミ}——物事を代替語で宣言する託宣^{タクセン}の神——と相談して、自分たちの国を高天原に譲ることを承諾した。

そして〈大己貴神〉は遠方に隠れることにし、息子の

事代主神は海中に隠れた。

経津主神^{フツヌシ}と武甕槌神^{タケミカヅチ}の二神は抵抗する残党を制圧して、高天原に戻った。

これが『日本書紀』にある出雲の国譲りの神話であるが、一書ではこのとき、高皇産靈尊が〈大己貴神〉に、国を譲ってもらおうかわりに天上界と同様な巨大な宮殿を造ってあげようと約束し、〈大己貴神〉は今後は軍事や行政から離れて神事を担当します——と答えている。

これが出雲大社の創建説話である。

出雲大社はいまでも高く大きいのが、昔はさらに巨大だったらしく、太い柱の遺跡などが発見されている。

平安時代の記録では、東大寺を上まわる高層ビルなみの十六丈（四十八メートル）もあったとされている。

この高さは信じがたいとする歴史家も多かったが、最近になって発掘された遺跡から、どうやら本当だったらしい——と推理されるようになった。

現在の出雲大社も八丈（二十四メートル）の高さを誇り、数多い神社のなかでも最高である。

『古事記』では、出雲平定に派遣された二神に命令する主体は高皇産靈尊とともに〈天照大神〉であり、国を譲

った〈大己貴神〉は〈大國主神〉となっていて、上記の他にも面白いエピソードが多く記されている。

たとえば、事代主神が帰服したあと、弟で勇猛な建御名方神^{ナカタクノカミ}が反抗したがやはり負けてしまつて、諏訪湖まで落ち延び、有名な諏訪神社の祭神となつた。

これは北陸から長野県にかけて、山陰地方とおなじく古代出雲の一族の勢力が強かつたことと関連しているらしい。

一般に日本の神社の祭神には、大和朝廷に反抗したかなわなかつたり悲劇に終わつたりした一族の神——出雲系やのちに記す〈饒速日命〉^{ニギハヤヒ}や日本武尊^{ヤマトタケル}など——がとても多く、朝廷側の神よりも多いくらいである。

これは大和朝廷の巧みな融和策——権力を持たせないかわりに名誉を与える策——でもあつたろうし、また日本人の心理にある判官贔屓^{ホウガンビイキ}でもあつたのだろう。

△天孫降臨^{テンソンコウリン}

こうして〈大己貴神〉^{オオナムチ}らが出雲の隅（神殿）に隠れたので、高皇産靈尊は瓊瓊杵尊^{ニギニギハヤヒ}を葦原中国に降臨させることにした。

瓊瓊杵尊は〈天照大神〉の孫にあたるので、天神の孫が降り立つという意味で、これを「天孫降臨」と呼んでいる。

瓊瓊杵尊は、天上の御座を押し離し、天の優れた道を選んで進み（図6・1）、日向の高千穂の峰^{ヒムカ}に降りられた。そしてその峰から天浮橋^{アマノウキハシ}という巨大な橋を伝つて平地におり、そこから豊かな土地を求めて歩いて、笠狭の岬^{カササ}に到着された。



図6・1 天孫降臨神話の謎
(昭和18年初等科國史上より)

一書や『古事記』では、このとき猿田彦神^{サルタヒコノカミ}という異形の神が出迎えて案内した話や、〈天照大神〉が「三種の神

器」を瓊瓊杵尊に授けて「鏡は自分の御魂だと思って祀るように」と述べた話や、また瓊瓊杵尊に付き添う武将として大伴一族の先祖神がいた話・・・などが記されている。

本章のトビラにある大伴家持^{オオトモヤカモチ}の長歌は、大伴一族に苦難があつたときに、この故事をひいて一族を諭し励ました一種の檄文^{ゲキブン}である。

さて〈卑彌呼〉との関連でいうと、場所が問題になる。まず日向であるが、むかしの日向は今とは違っていてずっと広く、宮崎県と鹿児島県一帯、つまり九州南部の全体を指していたらしい。

日向はいまは「ヒュウガ」と読むが、元来は「ヒムカ」であり、東（ヒムガシ）のもとになった言葉で、太陽に關係する方角を示す地名だったらしい。

その日向の高千穂の峰であるが、現在まで高千穂という地名が残っている場所は九州に二箇所、図6・2に示したように、宮崎県の北部と、宮崎・鹿児島県の県境にある。

このうち県境の霧島山の高千穂の峰が、有力とされている。

つぎに、ここから歩いて探した良い場所の笠狭^{カササ}であるが、これは薩摩半島の野間岬^{ノマサキ}だとされている。奈良時代に唐から帰化した鑑真和尚^{カンジン}が漂着した場所でもある。ずいぶん端の方まで行ったものだが、薩南諸島や南西諸島・台湾を経て大陸とつながるので、海洋漁労や技術の伝搬に關係するのかもしれない。

さらに高千穂の峰に來たときの出発点であるが、もし〈天照大神〉が〈卑彌呼〉の史実を反映しているとすれば、そこが《邪馬台国》^{ヤマトイコク}である可能性もあるので重要な



図6・2 高千穂と山門とはどこか
(二つの高千穂と二つの山門)

のだが、だとすれば、前述した二箇所の《山門》^{ヤマド}であるう。

図6・2に示しておいた。

ただし、高天原を《邪馬台国》に比定するのが妥当かどうかは、かなり疑問である。

△木花之開耶姫と海幸彦・山幸彦
コノハナノサクヤヒメ ウミサチヒコ ヤマサチヒコ

野間岬についた瓊瓊杵尊^{ニギハヤヒ}は、そこで見そめた鹿葦津姫^{カシツヒメ}——またの名を木花之開耶姫^{コノハナノサクヤヒメ}で天の神と山の精霊との娘——と結婚し、

火闌降命（海幸彦）
ホノスツリ

彦火火出見尊（山幸彦）
ヒコホホデミ

火明命（饒速日命）
ホノアカリ

——という三柱の神を生んだ。

長男の火闌降命は海の幸を得る霊力をもっていたので海幸彦と呼ばれ、二男の彦火火出見尊は山の幸を得る霊力をもっていたので山幸彦と呼ばれた。
ウミサチヒコ ヤマサチヒコ

三男の火明命は別名を《饒速日命》^{ニギハヤヒ}といつて、古代の謎を秘めた神であり、神武天皇より先に《大和》^{ヤマト}を制覇

していたとの伝承がある。またこの神は瓊瓊杵尊の兄弟——つまり一代上——だったとの説もある。

さて、あるとき海幸彦と山幸彦が相談して、自分たちの霊力（道具）を交換してみようということになった。しかしうまくいかなかったのもとに戻すことにしたが、弟が預かった釣り針が無くなってしまっていた。兄がそのことを責め立てたので、弟は老翁の助けで海中にある海神の宮殿に行つて、魚の口に入っていた釣り針を見つけた。

そしてそこに留まつて、海神の娘の豊玉姫^{トヨタマヒメ}と結婚した。やがて望郷の念が増して、陸に帰ることになったが、豊玉姫は身ごもっていたので、妹の玉依姫^{タマヨリヒメ}をつれて海中から海辺に出て、そこでお産をすることになった。

陸に戻った弟は海神に教えられた方法で兄を懲らしめて降参させたが、豊玉姫のお産のとき、姫との約束を破つて産屋をのぞいてしまった。

そこにいたのは龍の姿の姫だったが、見られた姫はひどく恥じて、産んだ御子を置いて海中に帰ってしまった。

この海幸山幸の物語にはいろいろな解釈があり、人生訓話にもなっているのだが、九州南部を勢力圏として大

和朝廷に逆らっていた隼人族^{ハヤト}との抗争が一部に反映している——との説がある。

さて、山幸彦と結婚した豊玉姫が産んだ御子は、やはり貴人であり、鵜草葺不合尊^{ウカヤフキアエズ}といわれた。

この御子は、母の妹の玉依姫と結婚して、

彦五瀬命^{ヒコイツセ}

稲飯命^{イナヒ}

三毛入野命^{ミケイリノ}

——をお生みになり、ついで、

神日本磐余彦尊^{カムヤマトイワレヒコ}

——をお生みになった。

この四柱の神は、いずれも男神である。

この最後の尊こそ大和朝廷の初代、神武天皇^{ジンム}なのだが、幼名を狭野尊^{サノ}、実名を彦火火出見尊^{ヒコホホデミ}（祖父にあたる山幸彦と同名）とされている。

神日本磐余彦尊^{カムヤマトイワレヒコ}はもちろん、後につけられた尊称である。

＊

こうしていよいよ、有名な神武天皇の東征物語^{トウセイ}がはじまる。

六・三

初代

神武天皇の東征物語

第一代(初代) 神武天皇の物語 (1)

——難波での苦戦と熊野まわり——

国風諡号

カムヤマトイワレヒコホホデミノスメラミコト
神日本磐余彦火火出見天皇

(尊称 始馭天下之天皇)
ハツクニシラススメラミコト

漢風諡号

ジンムテンノウ
神武天皇

〔在位・西暦前六六〇年～前五八五年〕

〔降誕・西暦前七二一年／崩御・西暦前五八五年〕＊

〔皇宮・畝傍橿原宮 (奈良県橿原市畝傍町)〕
ウネビカシハラノミヤ

〔御陵・畝傍山 東北陵 (奈良県橿原市大久保町)〕
ウネビヤマノウシトラノミササギ

＊推定実崩年は崇神天皇から

遡って西暦一世紀ごろか？

▽神武天皇、いよいよ《大和》へ向けて出陣

瓊瓊杵尊ニニギハヤヒの曾孫ソウソン(ヒマゴ)にあたる《神日本磐余彦尊》カムヤマトイワレヒコは四男で末子だったが、古代には末子相続の習慣があったらしく、十五歳で皇太子になり、父の崩御後は日向ヒムカの王になっていた。

四十五歳のとき、

「西の地は治まったが、遠方では国々が境をつくって争っている。平定しなければならぬ」

——として、どこへ進出すべきかを相談したところ、

老翁が、

「東方に四方を青い山で囲まれた美しい土地があります。そこへ天磐船アマノイワフネに乗って降臨した者がおります」

と答えた。

《磐余彦尊》イワレヒコは、

「それは《饒速日命》ニギハヤヒであろう。そこへ遠征しよう」

——といって、諸皇子をひきい、三人の兄とともに水軍を組織し、争う国々を統一するための東征の途についた。

(ここでは即位前の神武天皇を〈磐余彦尊〉^{イワレヒコ}と記すことにする)

途中いろいろな事はあったが、とくに困難はなく、図6・3の経路を通って吉備^{キビ}の国まで着いた。いまの岡山県である。

ここに三年ほど滞在して船や武器や食糧を調達し、浪速^{ナニワ}(難波)の湾に入り、河内^{カワチ}国の草香邑^{クサカノムラ}(東大阪市の日下あたり)に達して上陸した。

日下というと、大阪府と奈良県の境の生駒^{イコマ}山地のすぐそばだが、古代にはこのあたりまで船で行けたのである。

▽長髓彦^{ナカスネヒコ}との戦い

〈磐余彦尊〉^{イワレヒコ}はそこから陸路を東に進んで生駒^{イコマ}山地を越えようとしたが、そこで長髓彦^{ナカスネヒコ}の激しい抵抗にあった。

生駒越えの場所は、上陸地点のすぐそばで、現在の近鉄奈良線のトンネルの東大阪市側にあたり、物部^{モノノベ}氏の本拠のひとつとされる石切町^{イシギリ}の石切神社の近くだったらしい。

図5・2でいうと、左上枠外の「生駒」という文字のすぐ右のあたりである(図5・1も参照されたい)。

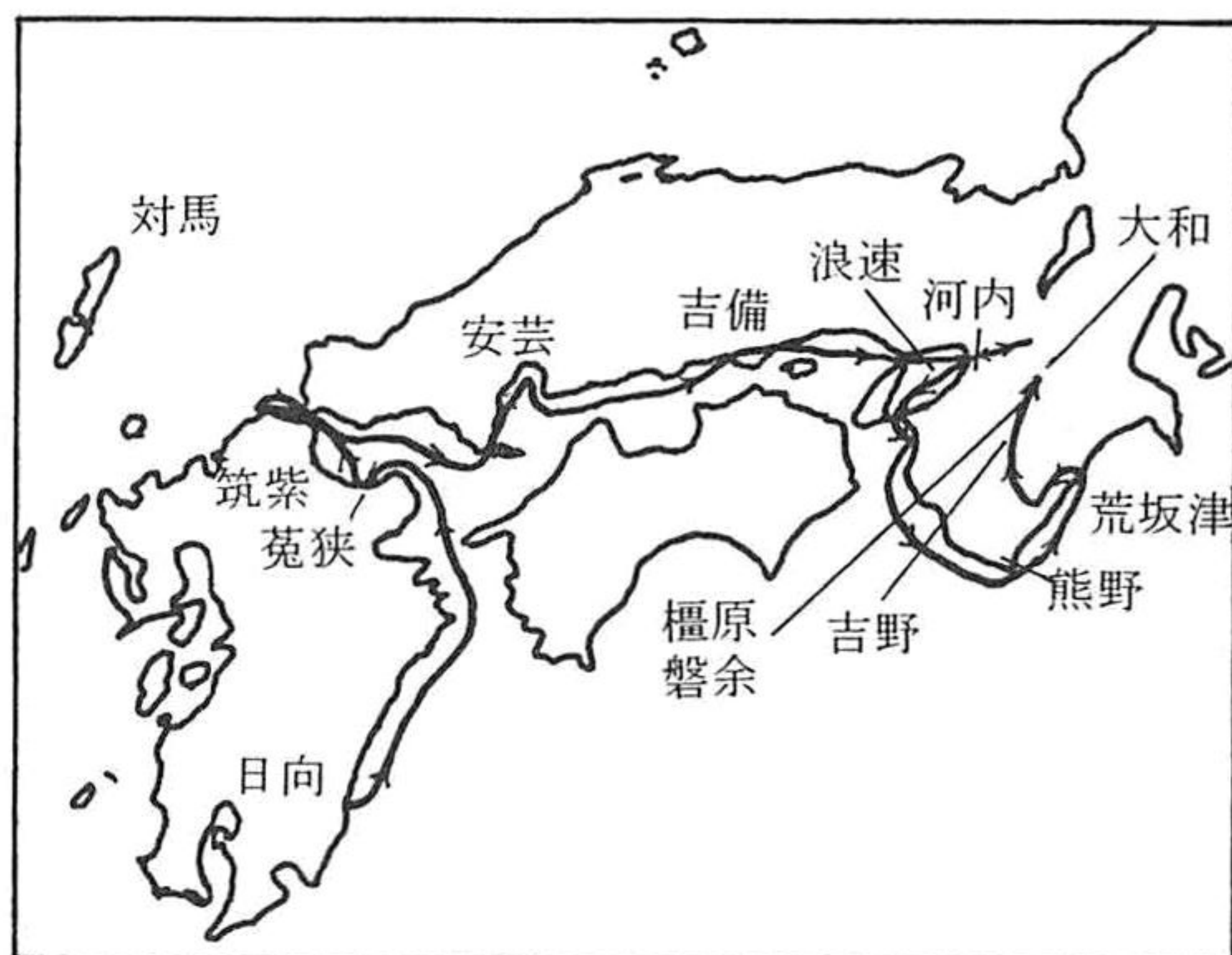


図6・3 神武東征の経路(日本書紀)

長髓彦はこの地に古くから勢力をもっていた物部一族の先祖——つまり〈饒速日命〉^{ニギハヤヒ}一族——だから、抵抗するのは当然のことで、〈磐余彦尊〉の軍勢は大苦戦となった。

そこで秘策をめぐらし、

「日神の子孫でありながら、太陽に向かって戦

っているのはまずい。いったん下がって太陽を背にして戦うことにしよう」

と、紀伊半島に沿って船で南下をはじめた。

▽熊野まわりの作戦

竈山^{カマヤマ}まできたとき、長兄の彦五瀬^{ヒコイツセ}命は、長髓彦^{ナガスネヒコ}軍の流矢でうけた傷が悪化して、亡くなられ、この場所に葬られた。

竈山はいまの和歌山市であり、彦五瀬命を祀る神社がこのこされている。

この近くで名草戸^{ナグサトベ}畔という者を討ち、紀伊半島を廻つて熊野に至り、今の新宮市のあたりの海路を進んだ。

そのとき、暴風に遭遇して、船は大揺れとなった。

すると次兄の稲飯^{イナイ}命とつぎの三毛入野^{ミケイリノ}命は、「母は海神の娘なのに、どうしてこんな目に遭うのか」といって、海に入ってしまった。

稲飯命は鮫の神となり、三毛入野命は常世国^{トコヨノクニ}（遠い不老国）に行かれた。

結局、三柱の兄神はすべて薨去^{コウキョ}されてしまったことになる。

兄たちを失った〈磐余彦尊〉は、皇子の手研耳尊^{タギシミミ}と二人で軍勢をひきいて、熊野の荒坂津^{アラサカノツ}（三重県の度会郡のあたりらしい／図6・3参照）に上陸し、ここで丹敷戸^{ニシキトベ}畔という者を討ったが、そのとき軍勢は毒氣にあたつてみな倒れてしまった。

危機の連続である。

▽〈天照大神〉の助け1

〔霊剣と八咫鳥で救われる〕

このとき、〈天照大神〉^{アマテラスオオミカミ}は布都御魂^{フツノミタマ}という霊剣を天から授けられた。

すると全員が眠りから醒め、元気になった。

この霊剣は、伝えられるところでは、先に経津主神^{フツヌシ}と武甕槌神^{タケミカヅチ}が出雲の〈大己貴神〉^{オオナムチ}に国譲りを迫ったときに、その切っ先の上に乗ったという、有名な剣である。

この霊剣の『日本書紀』での名は難しい文字（師の偏を音にかえた文字に霊）なので『古事記』にしたがったが、のちに物部一族^{モノノベ}に恩賞として与えられ、天理市にある〈石上神宮〉^{イソノカミ}に奉納されて祭神となった。

そして、戦乱の世の略奪から守るために拝殿後方の禁

足地に埋められていたのを、明治になって発掘し、あらためて社殿を建てて奉祭した。

もちろん学問的な同定は不可能だが、神話のなかの剣や鏡や神社が現存していて、今でも神話の神々の子孫が拝んでいるという事実は、日本の歴史の、世界でも稀な長期継続性を示している。

この霊剣で助けられた一行は山中を進もうとしたが、険阻で道もわからない。

そこでまた天の〈天照大神〉が助けを出して、道案内の八咫鳥^{ヤタガハス}を遣わした。

八咫^{ヤタ}の咫とは親指と人差指を拵げた長さで、二十センチ弱だから、八咫は一メートル以上となる。

『古事記』では八咫鳥だが『日本書紀』では頭八咫鳥のなつていて、羽の長さではなく頭の大きさが八咫とされている。超巨大な鳥である。

一般には、天地の初めの神のお一人である神皇産靈神^{カミムスヒノカミ}の孫の賀茂建角身命^{カモタケツヌミ}の化身または称号とされており、その孫が、上賀茂神社の祭神である賀茂別雷命^{カモワケイカズチ}となっていて、賀茂県主の祖とされている。

また熊野にある熊野神社の神事にも、日神祭祀^{ニッシンサイシ}のトーテムとして登場するし、八咫鳥神社という神社もある。八咫鳥神社の由緒譚では、賀茂県主の祖が黒い衣装を着て木から木へと飛び移りながら一行を案内したので、〈磐余彦尊〉が「まるで大きな鳥のようだ」と言われ、そこから出来た称号だとされている。

(拙著『女性天皇の歴史(栄光出版社)』参照)

熊野神社を根城とする熊野一族は、物部一族などとならんで〈饒速日命^{ニギハヤヒ}〉の子孫——つまり〈天照大神〉の子孫——のひとつとされ、独自の文化をもった豪族である。八咫鳥の道案内は、この熊野一族が早期に大和朝廷に帰順したことを示しているともされる。

そのほかいろいろな説があるが省略する。

この有名な神話は、昔の小学校の国史の定番であり、かならず挿絵があつた(図6・4)。

この八咫鳥に導かれて、天孫降臨以来の直参豪族である大伴氏の先祖たちが先頭にたつて険しい山道を進み、ついに兎田^{ウダ}に達した。

兎田はいまの宇陀郡^{ウダ}で、図5・2の右下に記入してある。奈良盆地の南端部に近い山地である。

ようやくにして〈磐余彦尊〉一行は、太陽を背にする南東の側から、〈大和〉にたどりついたのだ。

（このあたりからは、図5・2や図5・3の地図を参照しながら読んでいただきたい）

六・四

〈饒速日命〉の帰順と

狭井川の恋歌

第一代(初代) 神武天皇の物語(2)

——苦戦を制して大和進出に成功——

▽〈天照大神〉の助け2

〔天香具山の土で救われる〕

兎田^{ウダ}の首領は兄猾^{エウカシ}・弟猾^{オトウカシ}だったが、兄猾の悪巧みを弟猾が知らせたので、無事にすんだ。

そのあと〈磐余彦尊^{イワレヒコ}〉は隣接する吉野の地を視察し、井戸の中に棲んで光った身体で尾のある井光^{イヒカ}や岩の中にいた尾のある磐排^{イワオシワケ}別を帰順させた。

また阿太^{アタ}という地方にも行った。ここは現在の五條市の東部で、図5・2の左下の枠外にある。

それから兎田に戻って高倉山(宇陀郡にある山)の上から〈大和〉を眺めると、国見丘には八十梟帥^{ヤソタケル}の軍がおり、磐余^{イワレ}には兄磯城^{エシキ}の軍がおり、また弟猾の知らせで、磯城^{シキ}には磯城八十梟帥が、高尾張には赤銅八十梟帥がいて、容易なことでは〈大和〉に進出できないことが分かった。

ここで八十梟帥とはたくさんの武人といった意味である。

磐余と磯城は地名で、図5・3に描いておいたが、これはごく大まかな位置である。

国見丘は高倉山と桜井市の間にある山、高尾張も地名で、図5・2の左下の葛城^{カツラギ}地方(金剛^{コンゴウ}山地の東側の御所^{ゴセ}市やその南北の広い地域)らしい。

兄磯城は磯城の首領という意味で、磯城から磐余に出て陣地を張ったのであろう。

悩んだ〈磐余彦尊〉が祈ると、また〈天照大神〉が夢に現れて、

「天香具山^{アマノカグヤマ}の土を取って土器の皿や酒瓶を作っ

「て祈りなさい」

——といわれた。

そこで、九州の豊予海峡^{ホウヨ}で味方につけていた椎根津彦^{シイネツヒコ}を老夫に化けさせ、兎田で帰順させた弟猾を老婆に化けさせて香具山に派遣した。

香具山の位置は図5・2にあるが、畝傍山^{ウネヒ}・耳成山^{ミミナシ}とともに大和三山とされる聖山である。

二人は敵軍のなかを怪しまれずに進み、ぶじ香具山の土を持って帰った。

この土で土器を作って兎田を流れる川（たぶん図5・2の右下の梓外を流れる宇陀川^{テシジナチキ}）で天神地祇——すべての神々——に祈ると、いろいろな奇跡があらわれた。

〈磐余彦尊^{サカキ}〉は喜び、榊を立ててさらに諸神に祈った。

これが、土器の皿や瓶に供物や御神酒^{オミキ}を盛って祈る神社神事のはじまりとされる。

この神事をすませた〈磐余彦尊〉は、必勝の勢いで国見丘の八十梟帥を討った。

このあたり、討伐のたびに、久米歌^{クメ}といわれる歌が、大伴氏一族にひきいられた久米部という一族の人たちによって謡われている。

久米歌は現在でも宮内庁楽師が雅楽として演奏している。

まだ残党がいたが、大伴氏の先祖たちが、酒を飲ませて酔ったところを退治した。

▽〈天照大神〉の助け3

〔再度、八咫鳥の救援〕

こうして〈磐余彦尊〉の軍勢は、いよいよ磐余地方^{イワレ}に迫った。図5・3の右下部分に到着し、楢円で描いた磐余の地を目前にしたのだ。

磐余には兄磯城^{エシキ}と弟磯城^{オトシキ}という首領がおり、彼らが八十梟帥たちを配下にしていたのだが、強敵であり従おうとはしなかったので、八咫鳥^{ヤタガラス}に頼んで、空から帰順を呼びかけてもらった。

すると、兄磯城は鳥が不吉な声で鳴いている——と怒って矢を射た。

八咫鳥は逃げて、弟磯城の上で呼びかけたところ、弟磯城は恐れ畏んで、八咫鳥に料理をふるまい、〈磐余彦尊〉に帰順した。

兄磯城はあくまでも逆らったが、〈磐余彦尊〉の軍は二

手に分かれる作戦をたてて猛攻し、兵が疲労すると〈磐余彦尊〉が歌をつくって励ますなど、日本神話独特の歌の力を加味して、ついに兄磯城を平らげ、待望の磐余や磯城の地に進出することができた。

神武天皇の実名は彦火火出見尊だが、国風諡号の〈磐余彦尊〉に磐余地方の名が入っているのは、この磐余や磯城での戦いを記念したからかもしれないし、磐余が大和朝廷にとって「重要な土地」だったからかもしれない。さらに、出身の秘密が磐余地方にあったからかもしれない。

のちに聖徳太子らが活躍した飛鳥の隣接地である。神武天皇のこの名前の問題にも、古来諸説がある。

▽〈天照大神〉の助け4

〔金の鵄の救援〕

こうして〈磐余彦尊〉の一行は、大和平野を北上して、いよいよ、《大和》に君臨していた長髓彦の軍勢と直接対決することになった。

しかし、大阪湾から入って河内から生駒を越えようしたとき、戦って勝てず、長兄の彦五瀬命の命まで奪った

強敵なので、たとえ太陽を背後にしたといっても、簡単には討伐できなかった。

いくたび戦っても勝利できず、困惑しているとき、奇跡が起こった。

天がにわかにかき曇って、雹が降ってきたかと思うと、金色の霊妙な鵄が飛翔してきて、〈磐余彦尊〉の弓の先に止まったのである。

その鵄は光輝いて、稲妻のようであり、その光に撃たれて長髓彦の軍勢は目がくらんで混乱し、戦う気力も無くなってしまった。

この現象も有名で、やはり昔の教科書の挿絵の定番であった。図6・4の左である。この金色の鵄にちなんだ勲章が金鵄勲章で、いまは廃止されているが軍功拔群の軍人に下賜されていた。

その奇跡が起こったのは、鵄の村がなまって鳥見となっている場所で、図5・2の枠外のずっと北で、いまの奈良市西部の鳥見町や富雄元町のあたり（近鉄奈良線の富雄駅近く）らしい。奈良盆地を北へ一気に駆け抜けて長髓彦と対決したのだ。

▽〈饒速日命〉^{ニギハヤヒ}の出現と帰順

こうして勢いづいた〈磐余彦尊〉は、さらに軍勢を進めて強襲したところ、長髓彦^{ナガスネヒコ}は使者を派遣してきた。使者は述べた。

「昔この地に天神の御子である〈饒速日命〉^{ニギハヤヒ}がアマノイワフネ^{天磐船}に乗って降臨され、妹の三炊屋媛^{ミカシキヤヒメ}と結婚して可美眞手命^{ウマシマデ}をお生みになりました。天神の御子がお二方もおられるはずはありません」

〈磐余彦尊〉はこれに答えて、

「天神の御子はたくさんいる。もし〈饒速日命〉が本当に天神の御子なら証拠がある筈だ。見せなさい」

——といった。

すると長髓彦は、〈饒速日命〉の天上界の矢とそれを入れる用具を見せた。

〈磐余彦尊〉は、

「たしかに本物だ」

——と述べて、自分の矢と入れる道具を見せた。

それは〈饒速日命〉のものとまったく同じだった。

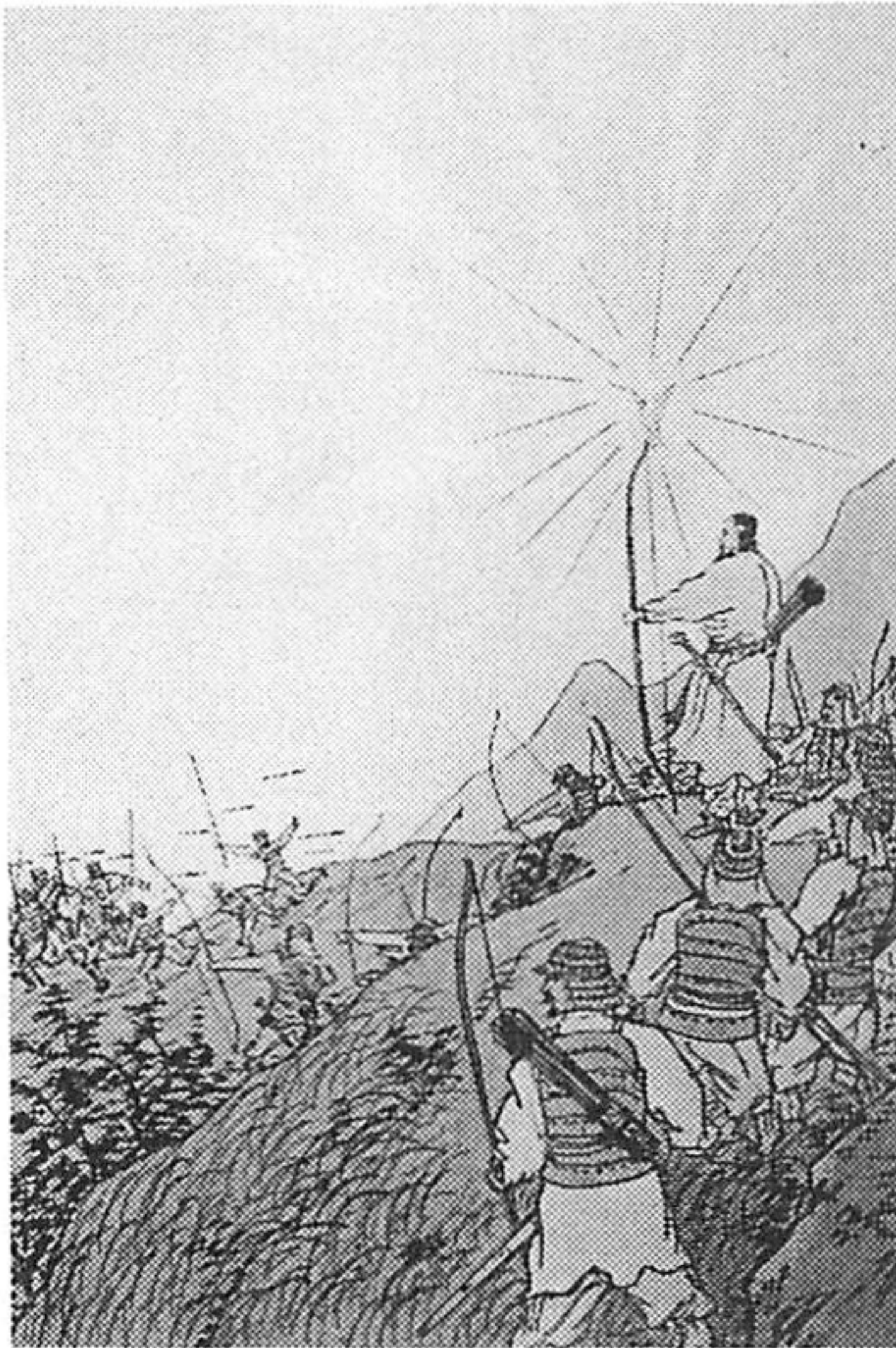


図6・4 神武天皇を救った ↑
八咫鴉(昭和15年小學國史上)
←と金鵄(昭和10年小學修身二)

この交渉で長髓彦は〈磐余彦尊〉に畏敬の念を抱いたものの、反抗心は変わらなかった。

しかしこのことを知った〈饒速日命〉は、天神が〈磐余彦尊〉の味方をしていることを感じとり、また長髓彦の乱暴な性質も知っていたので、長髓彦を葬って、〈磐余彦尊〉に帰順した。

〈磐余彦尊〉は、〈饒速日命〉が自分と同じ〈天照大神〉の子孫——つまり自分の祖父または曾祖父の兄弟——であることを知っていたし、また自ら帰順したので、これを褒賞して親しくされ、味方につけた。

この〈饒速日命〉の子孫は、尾張一族、熊野一族、海部一族などたくさんいるが、その代表が、大和朝廷の重臣となった物部一族である。

そのご、あちこちに残って反抗していた土蜘蛛たち——生駒市、奈良市、天理市、御所市などの土着の豪族たち——を破って帰属させた。

*

ここまでの東征譚を読むと、大和朝廷の先祖たちは、圧倒的な軍事力や戦いのうまさによって制覇するのではなく、先祖神の助けを得ながら、アノ手コノ手で敵を帰

順させて進んだことがわかる。

敵対していた豪族たちを策によって帰順させ、恩賞や名誉をあたえて味方につけるやり方は、ずっとあとの天皇たちも同じである。

神社にもその証拠が残っていて、大和朝廷のがわの神社よりも、敵対していた出雲の神社のほうが巨大だし、《大和》をめぐる競争相手だった〈饒速日命〉を祀る神社の数もじつに多い。

▽皇宮の造営と皇后の決定

こうして《大和》は瓊瓊杵尊の曾孫にあたる〈磐余彦尊〉によって平定された。

やがて〈磐余彦尊〉は次の詔勅を発する。

これは大和朝廷の施政方針演説の原型である。

「東征してから六年がたった。遠い地にはまだ賊もいるが、この《大和》は平穏である。そこで、都をつくり宮殿を建てて皇位につこうと思う。」

そして、天神の〈天照大神〉と高皇産靈神が国を授けてくださったご意向に応え、天孫

の瓊瓊杵尊の正しい御心を広めよう。

その場所は大和の奥深い場所である畝傍山

の東南の橿原（図5・2や5・3参照、現在

の橿原神宮のあたり）がよい」

そしてそこに宮殿を造営なさった。

また、皇妃を求めたところ、ある人が推薦して、（大己貴神）（大國主神）の子どもオオクニヌシの事代主神が玉櫛媛を娶って産んだ媛ヒメ踏鞴タタラ五十鈴媛命が容姿秀麗で最適です——と申し上げたところ、〈磐余彦尊〉はお喜びになって、宮中に召して正妃とされた。

正式におきめになるまえに〈磐余彦尊〉は、《三輪山》から流れ出る狭井川サイの近くで遊ぶ媛を見て気に入り、その媛の家に泊まって歌を詠んだと、伝えられている。

これが歴代天皇最初の御製である。

初代の天皇の最初の御製が、好きな女性と寝た情景を謡っているところに、大和朝廷のおもしろさがある。

葦原アシハラの穢シケしき小屋オヤに菅スガ置タミ

いやさや敷きて わがふたり寝し

（葦の原のなかのまずしい小屋で菅

のむしろを敷いて、わたしたちふたりは寝たものだ）

注目すべきは、この媛の名に踏鞴タタラがついていることである。

タタラとはもちろん古代の製鉄に用いられた足踏みの大型フイゴ（またはそのような製鉄場所）のことである。つまり初代の皇后が製鉄に関係する名をもっているのだ。

図8・5の左側を参照していただきたいが、媛の家は《三輪山》の山麓を流れる狭井川サイのほとりにあったと記されている。

そこにはいまも記念碑が建てられているが、水源の《三輪山》はもともと鉄鉱石を産したとされ、またそこから流れ出る川からも砂鉄がとれたとされている。

磐余と《三輪山》のあいだには、製鉄を意味する金屋カナヤという地名ものこされ、付近からは古代製鉄所の遺跡が発見されている。

さらにこのあたりは、玉や朱の原料も豊富だった。

大和朝廷の先祖が《三輪山》山麓の《大和》に進出した背景に、鉄やその他の産物の問題があったことを想像させる伝承である。

この媛命については、『古事記』にすこし違った伝承があり、『三輪山』に祀られる^{オオモノスシ}〈大物主神〉が、朱塗りの矢に変身して高貴な姫の陰部を突き、そして結婚して産まれたのがこの五十鈴媛だとされている。

『三輪山』の問題は第八章以降で詳しく述べるが、〈大物主神〉は^{オオクニスシ}〈大國主神〉の分身だという神話もあり、〈饒速日命〉一族のほかに『大和』の土地の豪族や出雲の〈大國主神〉一族などをともに納得させるために、大和朝廷が苦勞した痕跡が、『記紀』のさまざまな場面に顔を出している。

『古事記』は物語性がひじょうに強く、出雲の国譲りも、さまざまな童話風のエピソードがあり、史書というよりも物語といったほうがよい。

先の短歌も『古事記』にあるものである。

＊

なお神武東征伝承が史実の反映であることの証拠として、高地性集落の分布があげられている。

高地性集落とは、平地近くの高地に出来て、しばらくして消える集落のことで、平地の人たちが戦乱を避けて

高地に避難したためではないか——とされている。

そしてその分布を調べてみると、図6・3の神武東征経路に沿って沢山あり、他にはあまり無いのである。

この事から、大和朝廷の先祖の九州から大和への進出は、史実だったのだろうとの説が昔からある。

この問題について、最近では、芥川賞作家の高城修三が詳しい考察を発表している。

また、産経新聞の八木荘司は、

「このような神武東征譚が史実を反映しているとする、『魏志倭人伝』にある「倭国の乱」はこの東征の結果としておこった戦乱かもしれない。とくに東征経路に防御につよい高地性集落が多く出現したことは、この仮説を裏づけている」

——と述べている。

著者は、『卑弥呼一問一答（栄光出版社）』に、高城説をかみ砕いた形でこの問題を詳述したので、参考にしていただきたい。

高地性集落からの著者の推理だが、神武東征の時期は西暦一〇〇年前後ではなかったかと考えている。

六・五

神武天皇の即位と崩御

第一代(初代) 神武天皇の物語 (3)

——即位から崩御まで——

▽神武天皇の即位

こうしてすべては整い、辛酉(カノトリ)の年——西暦に換算すると紀元前六六〇年——に、(磐余彦尊)は橿原宮で即位し、初代の天皇となった。

そして正妃の五十鈴媛を皇后とされた。

この皇后は二人の皇子、神八井命と神渟名川耳尊をお生みになったが、後者が第二代の綏靖天皇である。

即位された(磐余彦尊)は、その国風諡号(御名)を、

「神日本磐余彦火火出見天皇」

——といわれる。

また『記紀』編纂後の人が漢風諡号をきめて、
「神武天皇」

——と申し上げた。

また人々はこの初代天皇を、
「始馭天下之天皇」

——と讃えた。

これは賞賛を意味する称号で、はじめて国を治められた天皇という意味である。

(もちろん六世紀より前には「天皇」という尊称はなかったもので、漢字での表記は「王」または「大王」だったであろう。日本語としての訓読みは「オオキミ」や「スメラミコト」だったのであろう)

さらに諱は、

「彦火火出見」

——である。

諱とは生前の実名のこと、死後は使用することを忌むのでイミナという。神武天皇の諱が祖父の山幸彦と同じであることは前述した。

はじめの二つの諡号(御追号)とは、先般崩御された

皇太后陛下に香淳^{コウジュン}皇后という御名を諡^{オク}つたのと同様な

命名で、国風諡号は『記紀』編纂時からだが、二字からなる漢風諡号は八世紀半ばに第三十九代弘文天皇の曾孫^{コウブン}にあたる学者・淡海三船^{オウミンノミフネ}が定めたともいわれている。

したがって古代のすべての天皇は、『記紀』が完成したあとは、国風・漢風二種の尊称を有している。

こうして、天神^{アマテラスオオミカミ}〈天照大神〉から数えて五代目にあたり、〈天照大神〉の孫の瓊瓊杵尊^{ニギハヤヒ}から数えて三代目、すなわち曾孫にあたる〈磐余彦尊^{イワレヒコ}〉が、初代の神武天皇となったのである。

即位ののち天皇は、大伴氏の先祖をはじめとして功臣たちの論功行賞を行われた。

敵対したがのちに帰順した首領たちにも、たとえば弟磯城^{シキ}は磯城の県主^{アガタスシ}、弟猾^{オトウカシ}は猛田(宇陀郡または橿原市の一部)の県主^{アガタスシ}……といったように、恩賞を与えられた。

最大の強敵だった〈饒速日命^{ニギハヤヒ}〉系の物部一族にも、熊野の苦難の際に〈天照大神〉から授けられた霊剣「布都御魂^{フツノミタマ}」を下賜され、その帰順の恩賞とした。

この霊剣は前記のように物部が担当する〈石上神宮^{イソノカミ}〉の祭神として祀られた。

▽神社祭祀の原型

論功行賞のあと〈磐余彦尊^{イワレヒコ}〉は勅語して、

「わが皇祖の御霊^{ミタマ}が、我が身を助けてくださった。そして天下は何事もなく治まっている。

そこで天神を都の郊外に祀って大孝をなそう」

——と申されて、斎場^{トミノヤマ}を鳥見山に設けて、神事をなされた。

これが有名な「鳥見山の祖神祭祀^{サイシ}」で、大和朝廷ができて最初の、きちんとした斎場を設けての祭祀であり、やはり昔の国史の挿絵の定番となっている。

図6・5にその例を示したが、日本画の画題としても、天の岩屋や天孫降臨や金鵄とならんで有名である。

図6・5の天皇の正面にあるのは、櫛^{サカキ}にかけられた鏡と勾玉^{マガタマ}と剣であり、三種の神器^{ジンギ}そのものかどうかはわからないが、そのような三点セットである。

また前の祭壇の上にあるのは、土器に盛られた、神酒^{オミキ}や農産物などの神饌^{シンゼン}(御供物)である。

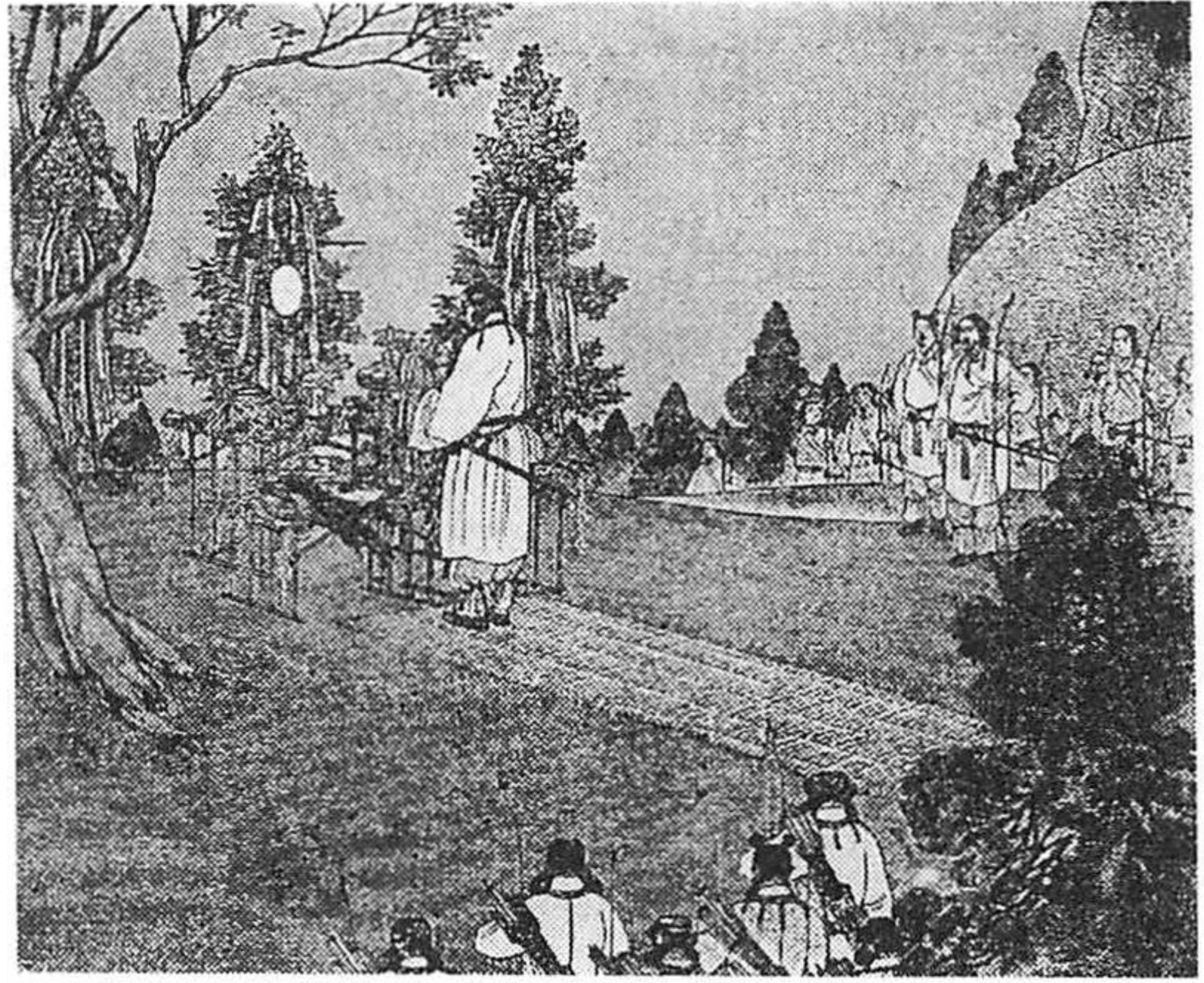


図6・5 神武天皇の鳥見山での祖神祭祀
(大和朝廷としての最古の神事)
(昭和15年小學國史上より)

これらは、兄磯城^{エシキ}らを討ったときに〈天照大神〉から教えられて香具山^{カグヤマ}の土で土器を作ったときにできたときとされる作法で、この神事作法はいまに続いている。

考古学的にいつても、古代の祭祀は山中の大きな岩などを斎場としておこなわれたことが多かったらしく、そ

のような遺跡が《大和》の地ほか全国に多くみられる。山中の岩での祈りそのものの起源はとても古く、年代的には縄文時代からなされていたらしい。

「鳥見山の祖神祭祀^{サイシ}」はこの縄文以来の伝統的な祭祀を大和朝廷が形をととのえておこなったことを示す伝承である。

また場所を定めたという意味では、神社の原型でもある。

じじつ、古い神社を発掘すると、縄文から弥生にかけての岩上の祭祀遺跡が見つかることが多い。

日本の神社の歴史はおそろしく古いのだ。

なお鳥見山とは、現在のJR桜井駅の南東約一・五キロほどのところにある小さな山で、長髄彦^{ナガスネヒコ}の鳥見とは別である。図5・2におおまかな位置を示してある。

渡部昇一は若いころにこの鳥見山に登って、そこから大和三山が一望できることを知り、

「ここなら神武天皇が天神を祀ったという『日本書紀』の記述によく一致していると思った」

——と語っている。

▽《大和》の美称

これで『日本書紀』における神武東征^{ジンムトウセイ}の物語は終わるのだが、最後に、この《大和^{ヤマト}》の地を讃えた美称が記されている。

神武天皇は、

「なんと美しい国だろう。狭いけれども蜻蛉^{アキツ}（トンボ）が輪^{アキツ}になっている姿のようだ」

——と仰せられたので、

「秋津洲^{アキツシマ}」

——という名ができた。

伊弉諾尊^{イザナギ}が昔述べた御言葉から

「秀真国^{ホツマ}」

——という名ができた。

《大己貴神^{オオナムチ}》は、

「玉牆^{タマカキ}の内つ国」

（美しい垣根のような山々に囲まれた国という意味）

——といわれた。

《饒速日命^{ニギハヤヒ}》は、天磐船^{アマノイワフネ}に乗って虚空を飛翔してこの

国に天降ったので、

「虚空^{ソラミツ}見つ日本^{ヤマト}の国」

——といわれた。

これから「ソラミツ」が日本^{ヤマト}（大和）の枕詞のひとつ

となった。

《饒速日命》の天磐船とは、この命が河内から生駒山地をこえて奈良盆地に入ったときの山越えを神話的に表現したものである。

▽立太子と崩御

即位から四十二年の年に、神渟^{カムヌナカワミミ}名川耳尊を皇太子とされた。この皇子が第二代の綏靖^{スイセイ}天皇である。

即位七十六年に橿原宮で崩御された。宝算（御年）百二十七歳であつた。

翌年、畝傍^{ウネビヤ}山東北陵^{マノウシトラノミササギ}に葬られた。

◎欠史八代のこと

これで《天照大神^{アマテラスオオミカミ}》の「天^{アマ}の岩屋隠れ^{イワヤ}」と神武天皇^{ジンム}の東征譚はおわるのだが、この初代の神武天皇と第十代の崇神^{スジン}天皇の間にある第二代から第九代の八代の天皇について、その業績はごくわずかしが残されていない。

《天照大神》以外で《卑彌呼^{ヒミコ}》の候補となりうる女性が

活躍するのも、第十代以降である。

しかし無視することはできないので、ここにその諡号^{シゴウ}や皇宮の場所を、『日本書紀』にあるとおりに記しておく。なかでも第七代から第九代にかけては、〈卑彌呼〉の候補のひとりである〈倭迹迹日百襲姫命〉^{ヤマトトトヒモソヒメミコト}の生誕に関係しているので、重要である。

第二代 綏靖^{スイセイ}天皇 (神渟名川耳天皇)^{カムヌナカワミミ}

〔八十四歳〕〔奈良県御所市〕

第三代 安寧^{アンネイ}天皇 (磯城津彦玉手看天皇)^{シキツヒコタマテミ}

〔六十七歳〕〔奈良県大和高田市〕

第四代 懿德^{イトク}天皇 (大日本彦耜友天皇)^{オオヤマトヒコスキトモ}

〔七十七歳〕〔奈良県橿原市〕

第五代 孝昭^{コウショウ}天皇 (觀松彦香殖稻天皇)^{ミマツヒコカエシネ}

〔百十四歳〕〔奈良県御所市〕

第六代 孝安^{コウアン}天皇 (日本足彦國押人天皇)^{ヤマトタラシヒコクニオシヒト}

〔百三十七歳〕〔奈良県御所市〕

第七代 孝靈^{コウレイ}天皇 (大日本根子彦太瓊天皇)^{オオヤマトネコヒコフトニ}

〔百二十八歳〕〔奈良県田原本町〕

第八代 孝元^{コウゲン}天皇 (大日本根子彦國牽天皇)^{オオヤマトネコヒコクニクル}

〔百十六歳〕〔奈良県橿原市〕

第九代 開化^{カイカ}天皇 (稚日本根子彦大日日天皇)^{ワカヤマトネコヒコオオヒヒ}

〔百十一歳〕〔奈良県奈良市〕

(一)内は国風諡号、(二)は宝算つまり崩御されたご年令、(三)内は皇宮がおかれたと伝えられる現在位置である。国風諡号の天皇は「スメラミコト」とお読みする。皇宮の位置は、開化天皇以外はすべて奈良盆地南部で、狭い意味での《大和》やその周辺にある。図8・1を参照されたい。

第十代の崇神^{スジン}天皇の実在性については疑う人は少ないが、それまでの第二代から第九代については、『記紀』における記述がわずかなので、架空の天皇だという史家もあり、欠史八代などと呼ばれている。

また初代の神武天皇は第十代崇神天皇の業績を投影した創作だろうという人もいる。

崇神天皇紀に、「初めて国をつくった天皇」という、神武天皇と同じ尊称が記されているからだ。

しかしこれに反論して、歴史的事実の反映がある——と主張する学者も多い。

何人かの学者が述べているが、もしすべて架空だったとしたら、年齢を標準的なものにして代数をずっと増やしただろうと考えられる。そのほうが大和朝廷の権威が

増すからである。

また神武天皇の即位年にしても、もっとずっと遠い過去にしたであろう。そのほうが外国への発言権も増すからである。

だが、奈良時代初期の『記紀』の編集者たちはそうはしなかった。

——ということは、じっさいにこのような天皇の伝承が各豪族に伝えられており、その初代の即位年を、なんとか納得できる範囲でなるべく古い時代にしようと、革命のおこるとされた辛酉の年の西紀前六六〇年とし、各代の天皇の宝算を「ありうるきわめて長寿」ということにしたのではないだろうか。

・・・これが、実在を主張する人たちの意見であり、著者も同感である。

初代の神武天皇の偉大な事績については、現在の著名企業の社史にのこる創始者の物語になぞらえると分かりやすい。

「地方から東京へ出てきて商店を創業してその町で最大にしたのが初代で、そのあと何代目かに有能な企業家や発明家が出て、その商店を一部上場の大企業に育て上げ

た」

——といった物語は、企業史の定番である。

一例をあげれば、マンモス企業の島津製作所の基礎を築いた実質的な初代は、蓄電池の世界的発明家だった二代目島津源藏だが、厳密な意味での初代は、その父親の初代島津源藏である。初代源藏も優れた技術者だったらしいが、二代目は飛び抜けた発明家兼企業家だったのだ。他の多くの企業についても、似たことがいえる。

厳密な意味での初代と事実上の初代との間に、真面目だが社史で強調するほどではない地味な何代かの商店主がいることも、もちろんある。

これを大和朝廷の伝承にあてはめると、大和朝廷の第一歩を印した厳密な意味での初代が神武天皇^{ジンム}で、王権を確立した実質的な初代が第十代の崇神天皇^{スジン}だということになり、それは初代が二人いるからおかしい——ということにはならない。

神武天皇から開化^{カイカ}天皇までは、《大和》の地のみを支配した豪族であり、崇神天皇になって、《大和》以外の各地の豪族まで帰順させた強力な政権となったのであろう。

このように考えれば、『記紀』の記述は理解できるし、また神武と崇神の間の何代かの天皇の事績がとりたてて

記すほどではないことも理解できる。

＊

第二代から第九代にかけての天皇紀に記述が少ないと記したが、〈倭迹迹日百襲姫命^{ヤマトトトヒモソヒメミコト}〉の生誕以外にも、興味ぶかい話はのこされている。

その一つに、神武皇后の媛蹈鞴五十鈴媛命が歌で皇太子を救ったエピソードがある。

狭井川^{サイガワ}よ 雲立ちわたり 畝傍山^{ウネビヤマ}

木の葉さやぎぬ 風吹かんとす

——がそれである。

これは、皇太子はじめ自分の生んだ御子たちに対して異母兄が叛乱しようとしたとき、その急を知らせた歌とされている。

神武天皇崩御ののち、皇后はこの異母兄の妃になった。だから、自分の義理の息子を夫にしたところ、その夫が自分の実子を殺そうと計るという、悲惨な事件である。なおこの異母兄は実質上は一時期天皇だったのでないかともいわれている。

こういう複雑な事情が記されている『記紀』は、神武天皇紀であつても、やはり史実を反映していると考えられる。

完全な創作ならば、こんな生臭く不名誉な話は書かなかっただろうからである。

六・六

「^{アマ}天の^{イワヤ}岩屋伝説」は

果たして^{ニッシヨク}日蝕神話か

◎高天原はどこにあったのか

第六・一節でも述べたように、

「^{ヒミコ}卑彌呼」Ⅱ「^{アマテラスオオミカミ}天照大神」説

は、

「^{ヤマタイコク}邪馬台国」九州説」

——と結びついており、東征神話^{トウセイ}とも関係してくるのだが、その結びつきかたにも無数のヴァリエーションがある。

それを検討するためにも『日本書紀』の神代紀の概要を記してきたのだが、その神話のなかで、場所的に明確なのが、^{アマテラスオオミカミ}「天照大神」の孫の瓊瓊杵尊^{ニニギ}が降臨した九州の日向^{ヒムカ}と、その曾孫^{ソウソン}の神武天皇^{ジンム}が東征して即位した^{ヤマト}《大和》の橿原^{カシハラ}である。

しかしその前の、^{タカミムスビノカミ}「天照大神」や高皇産靈神^{タカミガハラ}らのいた高天原とは、いったいどこなのだろうか？

もちろん神話では天上界らしい神々の世界だが、現実にはそれはありえないから、それが史実の反映だったとしたら、そして、もし「天照大神」が実在の女王の尊称だったとしたら、その場所を探さねばならない。

そして、この章の主題である、

「^{ヒミコ}卑彌呼」Ⅱ「^{アマテラスオオミカミ}天照大神」説」

——を採用したとすると、その場所——高天原の場所——こそが^{ヤマタイコク}《邪馬台国》だ、ということになる。

つまりそこに女王^{ヒミコ}「卑彌呼」がいて——または跡継ぎの^{トヨ}「臺與」がいて——それが日本の伝説では「天照大神」になったのだ、というわけである。

「天照大神」説における^{ヤマタイコク}《邪馬台国》の位置は、とうぜ

んながら九州内部かその付近ということになるが、のちの大和朝廷との関係については、多くの意見があるので、

「《邪馬台国》大和説」

とあわせて、代表的な分類を、ここに示しておこう。

◎田中卓の分類

皇學館大學の元学長の田中卓^{タカシ}は、つぎのように分類して解説している。

＊

一 「《邪馬台国》大和説」

A 《邪馬台国》と大和朝廷との関係を認める立場

B 《邪馬台国》と大和朝廷との関係を認めない立場

二 「《邪馬台国》九州説」

C 《邪馬台国》と大和朝廷との関係を認める立場

D 《邪馬台国》と大和朝廷との関係を認めない立場

D・一 まったく別個とみる立場

D・二 両者の前身が一つだったという立場

＊

このうちAでは、『記紀』のなかに〈卑彌呼〉が隠されているかもしれない——とも考える。もちろん『記紀』には記録されずに終わったという推定もありうる。

Bでは、大和朝廷の成立をずっと遅いとして、〈卑彌呼〉の時代よりあとの、たとえば四世紀末以後とされる第十^{オウジン}五^{ニントク}代應神天皇や第十六代仁徳天皇のころ、とする。時代が違うから関係しないのは当然である。

Cは、『《邪馬台国》』が狗奴^{クナ}国に負けて解体させられ、そのため東方に移動して大和朝廷になったという考えである。

D・一は、文字どおり無関係とする考えだが、D・二はすこし違っていて、〈卑彌呼〉の時代より前に「原・邪馬台国」なる前身が九州にあり、それが九州の《邪馬台国》と大和の《邪馬台国》に分かれた——とする仮説である。

D・二のこの推理によると、九州の《邪馬台国》に〈卑彌呼〉がおり、同じ時期に大和の大和朝廷に第九代開化^{カイカ}天皇や第十代崇神^{スジン}天皇が出現したことになる。

田中卓はさまざまな考察をおこなって、D・二説をと
なえている。

そして九州の《邪馬台国》の場所として、図6・2の
福岡県山門^{ヤマド}を候補にしている。

これは江戸時代の新井白石^{アライハクセキ}以来、多くの学者が唱えて
きた説でもある。

九州北部に近い山門から南部の日向の高千穂に進出し
さらに野間岬^{ノマ}まで進出したとすれば、天孫降臨^{テンソンコウリン}の物語と
の整合性も良い。

ただしこの田中説では、《天照大神》が実在したとして
も、《卑彌呼》の時代の前の存在となるので、

「《卑彌呼》Ⅱ《天照大神》説」

——にはならない。

しかし《卑彌呼》についての物語が《大和》の大和朝
廷に伝わり、それが記紀神話の元になったとすれば、あ
る意味では《天照大神》説でもある。

◎井沢元彦の分類

田中卓とは対照的なアマチュア研究家である井沢元彦
も、この問題に熱心にとりくみ、次のような分類をして
自説を展開している。

*

a 「《邪馬台国》大和説」

- (一) 大和において、そのまま大和朝廷に発展した
- (二) 大和の地で、大和朝廷に滅ぼされた
- (三) 他の勢力に滅ぼされ(あるいは連合し)、大和
朝廷になった

b 「《邪馬台国》九州説」

- (四) 大和へ移動(東征)し、大和朝廷になった
- (五) 九州の地で大和朝廷に滅ぼされた
- (六) 他の勢力に滅ぼされ(あるいは連合し)、大和
朝廷になった

*

井沢の分類で興味ぶかいのは(四)であり、これは田
中卓のCやD・二にはほぼ同じで、有名な学者としては文
化勲章の和辻哲郎^{ワツジテツロウ}が一時唱えたことがある。

とても魅力的な仮説であるため、これをいろいろアレンジして、数多くの《邪馬台国》^{ヤマトイコク}論が書かれ、また小説が書かれている。

井沢も、さまざまな視点から検討して、この（四）の系統の考えを持つにいたったようである。

ところで、

「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説

——には、場所が九州らしいことや、女性であることや、神武東征の神話と結びつきやすい……といったことのほかに、どのような根拠があるのだろうか。

のちの『日本書紀』の各天皇紀には、日向を平定した話や日向から妃を迎えた話などがあるので、九州南部の日向地方が、大昔から、大和朝廷と密接に関係していたらしいことはうかがえる。

しかし、それだけでは、「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説にはならない。

なにしろ『記紀』神話の時代と『魏志倭人伝』^{キシワジンデン}の時代とは、表面上は隔絶しているもので、これまで記したこと他にそのような根拠がないと、説得力はない。

そこで出てくるのが、^{アマノイワヤ}天の岩屋の物語と日蝕の関係で

ある。

これは井沢元彦が重視している関係なのだが、以下、その話をかいつまんでしよう。

◎「天の岩屋」事件の日蝕説

第六・一節に記したように、〈天照大神〉は弟の素戔鳴尊^{スサノ}の乱暴に呆れて、「天の岩屋」^{アマノイワヤ}に隠れてしまい、そのため世界が暗くなり、大騒ぎがおこった。

素戔鳴尊は出雲系神話の祖神ともいわれ、この話は大王権と出雲豪族の軋轢^{アツレキ}を象徴しているようであるが、それはともかく、この、岩屋に隠れたのであたりが暗くなった——という話が、何を意味しているのかが重要である。

これについては、いくつかの説がある。

ひとつは、原因となった素戔鳴尊の乱暴で田畑が荒らされたという記述から、植物を駄目にする台風や天候不良をあらわしているのだろう、というものである。

もうひとつは、冬至になって太陽がかげり、寒くなり、田畑が枯れる有様を、あらわしているのだろうという説

である。

これらの一般的な自然現象のほかに、きわめて説得力のある第三の説がある。

それは日蝕説である。

つまり、

「天照大神」が岩屋に隠れてあたりが暗くなったのは、天体の知識の無い古代人が恐れた皆既日蝕を反映した神話であり、そこから出て世の中が明るくなったのは皆既日蝕が元に戻ったことを意味している。また同時に考えられるのは、岩屋に隠れた時点で——つまり日蝕の衝撃で——「天照大神」は死ぬか殺されるかしており、岩屋から出て明るくなったのは優れた霊力をもつ後継者が出現したことを意味しているのかもしれない。岩屋は墳墓の象徴でもある」

——という説である。

この日蝕説の最初の提唱者は江戸中期の儒学者・荻生徂徠オギユウソライだといわれているが、これはとてももつともらしい説だといえる。

《大和》の西側、奈良盆地の南西部は葛城カツラギ地方であり、そこは古代の豪族・葛城一族の勢力圏で、最終的には大和朝廷に帰順したのだが、その葛城地方では、五世紀ごろまで、

「日蝕がおこるとあたりの事物を破壊する祭」

——がなされていたといわれる。

古代にはもちろん日蝕の予測などできないから、これは突発的な祭りであるが、素戔鳴尊の乱暴と「天照大神」の岩屋隠れをじゅうぶんに連想させる祭りであり、右の説の傍証になっている。

＊

では、古代における皆既日蝕は何年に起こっていたのだろうか？

古代日本人が見たであろう皆既日蝕の年月日やその様子の推定は、昔からなされていたようだが、さいきんでは天文学者の齊藤國治による研究が有名である。

それを次節に記す。

六・七

古代の日蝕と『ニッショク記紀』の実紀年

◎古代の日蝕の一覧表

サイトウクニジ 齊藤國治の古代日蝕のデータは、井沢元彦が着目して評価し、一般に紹介したので、知られるようになった。それによると、日本列島の本州か四国か九州をとおり中心食が見られた年月日は、西暦紀元後については以下のとおりである。

*

1	西暦	一年	六月一〇日	(皆既)
2	西暦	四一年	四月一九日	(金環皆既)
3	西暦	五三年	三月九日	(金環皆既)

4	西暦一〇三年	六月二二日	(金環)
5	西暦一四六年	八月二五日	(金環)
6	西暦一五四年	九月二五日	(皆既)
7	西暦一五六年	三月九日	(皆既)
8	西暦一五八年	七月一三日	(皆既)
9	西暦一七九年	五月二四日	(金環皆既)
10	西暦二〇〇年	九月二六日	(金環)
11	西暦二四七年	三月二四日	(皆既)
12	西暦二四八年	九月五日	(皆既)
13	西暦二五四年一〇月二九日		(金環)
14	西暦二七三年	五月四日	(皆既)
15	西暦三〇一年	四月二五日	(皆既)
16	西暦三〇二年一〇月八日		(皆既)
17	西暦三〇八年一二月三〇日		(金環)
18	西暦三二八年	五月二六日	(皆既)
19	西暦三八四年一〇月三一日		(皆既)
20	西暦四五四年八月一〇日		(皆既)
21	西暦四六九年一〇月二一日		(金環)
22	西暦四七九年	四月八日	(金環)
23	西暦五二二年	六月一〇日	(皆既)
24	西暦五七二年	九月二三日	(金環)
25	西暦五七四年	三月九日	(皆既)

＊

以上は紀元後であるが、紀元前の日蝕もいろいろと計算されている。たとえば、西暦前一三八年十一月一日の日蝕が知られている。

これら紀元前の日蝕が「天の岩屋」事件の神話になった可能性もなくはないが、〈卑彌呼〉との関連づけでいえば古すぎる。

だから面白いのは、『魏志倭人伝』に書かれた時代らしい5から14の間くらいである。

5～8は、長命だったとされる〈卑彌呼〉が生まれたころ、あるいはその少し前と想定され、『魏志倭人伝』の記録どおりだとすれば、日本列島に大乱がおこって国々が互いに争い、男の王ではどうしようもなかった時代——つまり倭国大乱の時代——である。

もつとも、〈卑彌呼〉の時代に日本列島の統一が進んだとすれば、その前は統一されておらず、豪族たちが国々（集落）をつくり境界をつくって争っていたに違いないから、『魏志倭人伝』の信憑性いかにかわらず、それは歴史の必然であり、特異な事件ではない。

じじつ、この時代——弥生時代——の遺跡の多くは、^{カンゴウ} 厳重な環濠に守られたつくりになっている。

この5～8が日本に何か影響を与えたかどうかは、史料が何もないので分らない。

つぎの9や10は、たぶん〈卑彌呼〉が女王になったかならないかの時期だと思われるが、これも史料がなくて考えようがない。

◎〈卑彌呼〉の没年に日蝕が起こっていた！

で、問題は、11と12である。

11の西暦二四七年は、〈卑彌呼〉が^{クナ} 狗奴国の始末に困って魏に助けを求めた年にあたる。

また12の西暦二四八年は、多くの学者が〈卑彌呼〉が死んだと想定している年である。

^{タイホウ} 帯方郡の太守が〈卑彌呼〉に^{ゲキブン} 檄文をもって告げ諭したとされるのがおそらく二四七年か二四八年の初めであり、その告諭のことが書かれたそのすぐあとに、〈卑彌呼〉が死んだ——と記されていることは、第三章で述べたとおりである。

死んだ年そのものは書かれていないのだが、もしまだずっと生きていたとしたら、帯方郡や魏の宮廷にさらに使者を送った記録が残っていたであろう。

しかしそれが無くてとつぜん〈臺與^{トヨ}〉の話になってしまうので、二四七年に使いを送って告諭をうけたすぐあとの二四七年の暮れから二四八年にかけての一年くらいの間に死んだのだろうと、推察されるのである。

つまり、〈卑彌呼〉が死んだと想定される二四七年と二四八年の両方の年に「日蝕」が起こっているのだ。

この暗示的な「日蝕」の、もうすこし詳しいデータを、齊藤國治の著書によって、図6・6に示した。

11の二四七年の三月の日蝕は、九州福岡では日没直前に皆既蝕になっており、《大和》では六十三パーセントくらいの部分蝕で日没に入っている。

つまり二四七年の日蝕は、九州では明瞭だが、《大和》ではちよつと暗い——というていどのものである。

一方12の二四八年の九月の日蝕は、九州・大和ともに早朝に九十パーセント以上の蝕分となっており、早朝から起きて働いていたであろう古代の人たちにとっては、かなりの衝撃だったろうと考えられる。

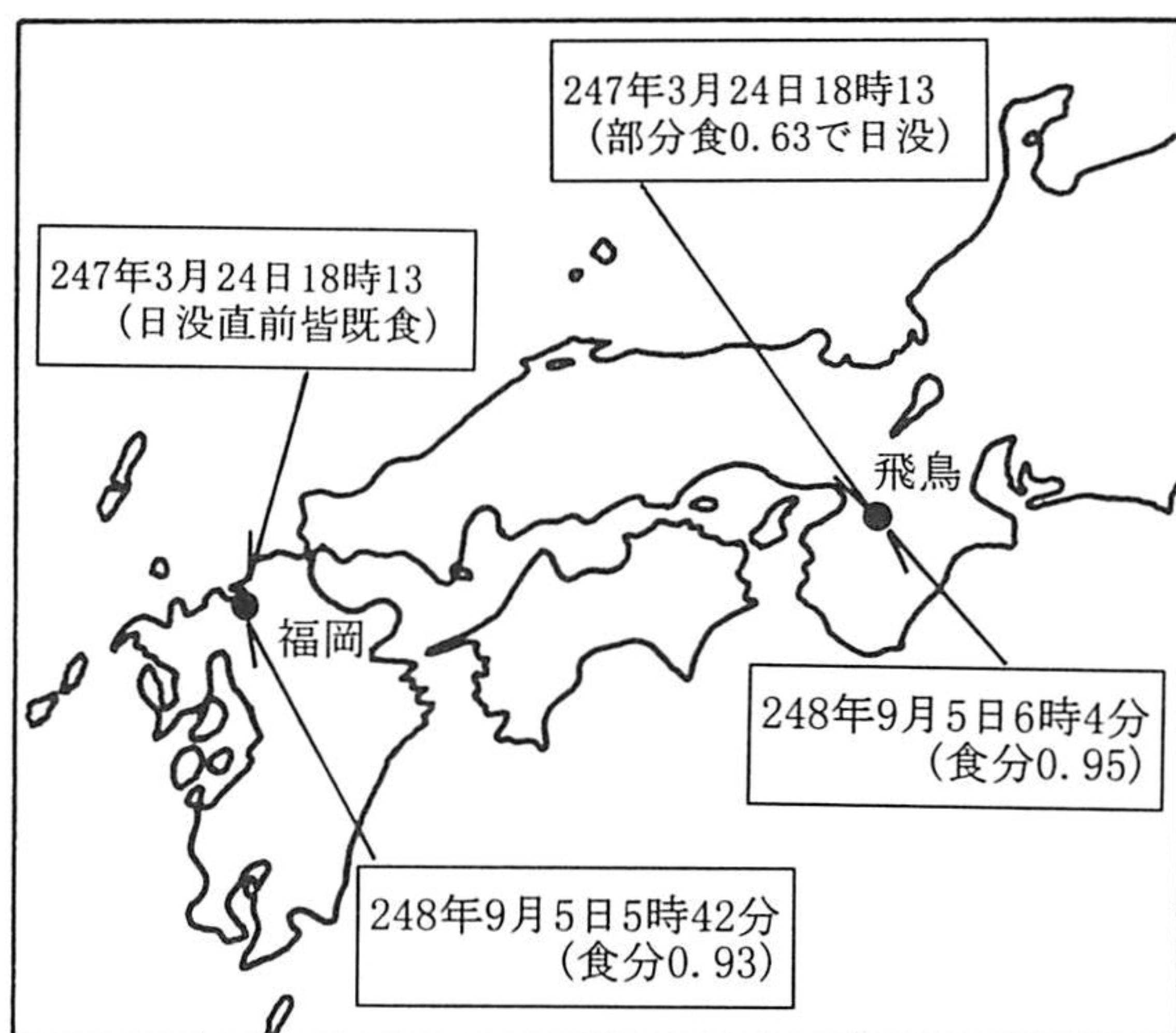


図6・6 西暦247年と248年の日蝕
(齊藤國治『宇宙からのメッセージ』雄山閣出版より)

もしこれらの日蝕が〈卑彌呼〉の死と関連づけられるとすれば、それはたぶん12の二四八年のほうであろう。西暦二四七年は〈卑彌呼〉の使者が帯方郡へ派遣された年であり、派遣が年初でそれへの返書の使者が大急ぎで来たとしても、その年の三月に間に合うとはちよつと考えにくい。

また、この年の日蝕が目立つのは九州のみであるが、それでも日没直前なので、「日の暮れるのがちよつと早い」というていどのことだったであろう。

したがって、日蝕が〈卑彌呼〉の死と深い関係にあるとすれば、それは西暦二四八年のものであり、これはかなりの効果があつたと推理できる。

また、シナ王朝の盛衰など日蝕とは無関係なくつもの傍証から、多くの学者が〈卑彌呼〉の死を西暦二四八年と想定していることも、考慮に入れるべきである。

こうして、西暦二四八年の日蝕が、〈卑彌呼〉の死の年に起こり、両者が関連しており、しかもそれが〈天照大神〉の「天の岩屋伝説」に反映しているとすると、考えられるストーリーは次のようなものである。

◎〈卑彌呼〉の死因は日蝕か？

二世紀後半の日本列島は、各地の集落に住む豪族たちが領土や資源を争って収拾がつかなくなり、そこで神につかえる高貴な女性〈卑彌呼〉が靈感を買われて北九州

の《邪馬台国》の女王となつて、男弟を指図して国々を平定した。

しかし九州南方の狗奴国だけは何年たつても逆らうことをやめず、困りはてて西暦二四七年に、それまでも外交関係のあつた帯方郡にお墨付きを貰いに行つたが、それでもうまくいかなかった。

そしてその翌年の西暦二四八年九月に皆既日蝕が起こり、人々の不安は頂点に達し、その心労で〈卑彌呼〉は死んでしまった。

あるいはまた、日蝕は〈卑彌呼〉の神子（巫女）としての靈力が落ちたためで狗奴国を平定できないのもそのためだと考えた人たちによつて、殺されてしまった！

そのあとまた騒乱が続いたが、靈力をもつ若い〈臺與〉が〈卑彌呼〉の後継となつてようやく一段落した。

そしてそのさらに後継者が北九州から南九州の高千穂の峰などに移り、さらにまたその後継者が東に移つていつて大和朝廷を樹立した。

この、日蝕で死んだ〈卑彌呼〉の記憶と、〈卑彌呼〉を後継した〈臺與〉の記憶とが、神話として伝承され、六世紀から七世紀にかけて文字として記録され、『記紀』のなかの「天の岩屋伝説」となつた。

＊

これはかなり迫力のあるストーリーであり、〈卑彌呼〉以後の年代については疑問も生じるが、一応の合理性もある。

今でも多くの好事家や一部の学者がこの説をとっていることも、理解できる。

上の仮説で〈卑彌呼〉の神子（巫女）としての霊力というのは、『魏志倭人伝』の鬼道——すなわち『記紀』にある神道——のことであるが、それはいまの新興宗教の教祖の祈りのような妖しげなものではなく、現在の総理大臣や大統領の政策決定能力と同じである。

『魏志倭人伝』の〈卑彌呼〉と男弟との関係が事実だったとすれば、〈卑彌呼〉が神に祈って決定した政策を、男弟が行政の長として実行していた、ということになる。

こういう、男女の組み合わせによる祭政の遂行は、『記紀』にもよく出てくるし、昔の沖縄にもあったもので、「彦姫制」ともいわれる。

——ということなので、霊力を失ったというのは、政

治的指導力が無くなったのとまったく同義である。

要するに戦争や政策についての正しい判断力が無くなったという意味である。

したがって、元々指導力を無くしていた〈卑彌呼〉が、日蝕によるショックでさらに指導力を失い存在感がなくなり、ついに死んでしまった——ということになる。

さらに、指導力の減退によって「殺されたのかもしれない」という「〈卑彌呼〉殺人事件」は、松本清張や樋口清之らが真剣に唱えていた説である。

じじつ、弥生期の古墳から、下腹部にたくさんの矢を射られて死んだ高貴で老齢の女性の遺骨が出てきているそうで、これは老齢になって霊力を失った——政治的判断力を失った——姫神子（巫女）を後継者にするために殺される風習があった証拠の一つ、ともされている。

「〈卑彌呼〉Ⅱ〈天照大神〉説」では、〈天照大神〉が機織りの棒で攻撃された『記紀』神話の話をこれに結びつける事も可能だし、陰部を突かれたという一書での説話も、なにやら暗示的である。

・・・というようなことで、

「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説

——においては、日蝕にともなうこの《邪馬台国》^{ヤマトイコク}の騒動を、シナ式におおまかに描いたのが『魏志倭人伝』^{キシワジンデン}であり、この事件全体を神話にしたのが『日本書紀』^{ニホンシヨキ}であるとし、ただ『日本書紀』の方は、神武天皇即位をずっと古いおめでたい年に設定するために、紀年を大きくずらしてある——とするわけである。

◎神代の実紀年とは？

さいごに、《天照大神》^{アマテラスオオミカミ}と神武天皇^{ジンム}の実紀年の推理であるが、これは、

「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説

——ではじつにはつきりしており、神話ではいかに古くとも、実在の《天照大神》は三世紀前半に活躍した女王^{ミコ}ということになる。

一方神武天皇はその子孫だから、三世紀以後であり、この説の多くの研究家が、《神功皇后》^{ジンクウ}紀にみえる——次

章で述べるような——別の東征伝説を重視していて、神功・應神^{オウジン}・仁徳^{ニントク}の時代、つまり四世紀末から五世紀にかけて九州から大和へ進出した豪族の活躍の神話化だろう——としている。

もちろんこれへの反論も数多くだされており、外国の史料とも合わないし、また考古学的研究結果とも合わないという説もある。

以上の「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説とは別に、『記紀』における紀年が、古代の天皇がすべて実在だったとしても実際の紀年とは合っていない——という研究は、明治時代からあり、明治の末期にはほぼ定説となっていた。

したがって、第一章でも記したように、大東亜戦争が終わるまでは、『記紀』に記された神武天皇^{ジンム}の即位年をただただ信ぜよといわれていた——という説はまちがっている。

ただ、具体的な数値については、さまざまな意見があつて、平成になつても結論はでない。

おおまかには、神武天皇の即位が、もし史実だったとしたら、西暦一〜二世紀だろうし、第十代の崇神天皇^{スジン}の

在位期間は、三世紀の半ばから後半だっただろう——といわれている。

＊

崇神^{スジン}天皇の御代や、神功^{ジンクウ}皇后の御代の実紀年の推理は、〈卑彌呼^{ヒミコ}〉の正体を探る上で重要なので、またのちの章で詳述する。

六・八

〈卑彌呼〉^{ヒミコ} Ⅱ

〈天照大神〉^{アマテラスオオミカミ} 説

の確からしさ

本節では、

「〈卑彌呼〉^{ヒミコ} Ⅱ 〈天照大神〉^{アマテラスオオミカミ} 説」

——の確からしさについての著者の見解をのべて、この章のまとめとすることにした。

ただその前に、〈大國主神〉^{オオクニヌシ}と〈饒速日命〉^{ニギハヤヒ}について、おおまかに触れておく必要がある。

まとめるに当たって念頭に置くべき重要な神——また豪族——だからである。

◎ 〈大國主神〉^{オオクニヌシ} の謎

『日本書紀』では、国譲りの相手側の神は〈大己貴神〉^{オオナムチ}であり、それは〈大國主神〉^{オオクニヌシ}と同一神ともいわれ、また何代か前の別神ともされるのだが、同一神としての〈大國主神〉が有名で親しまれ、のちには大黒様にまでなつてしまっているの、ここでは〈大國主神〉で統一する。もともとが古い伝承で、豪族を神として表現したものだろうから、同一でも親子でもそれほどの問題ではない。

この興味ぶかい出雲の神^{イズモ}についての、典型的な解釈はつぎのとおりである。

『記紀』の記述によれば、〈大國主神〉は〈天照大神〉^{アマテラスオオミカミ}の弟の素戔鳴尊^{スサノ}の子孫だから、先祖は大和朝廷と同じことになるが、これは便宜的なもので、たぶん出雲^{イズモ}（島根県）の地に本拠を持ち、山陰山陽の中国地方に昔から勢力をもっていた豪族だったのであろう。

この中国の豪族が九州大和一族の東方進出の妨げとなるので、幾度となく九州から討伐部隊を派遣したがうまくいかず、何回目かでやっと帰順させて、政治的軍事的権力を取り上げるかわりに出雲地方の行政と祭祀の名誉ある役割をあたえた史実が、さまざまな神話となつて残

ったのだろう。

『日本書紀』の国譲り神話は既述したように実質的だが、『古事記』の〈大國主神〉の項は、白兔の話や死と再生などいくつものお伽噺的な挿話に彩られていて興味ぶかい。

古代日本人の「心」が伝わってくるようだ。

ところで、この討伐部隊のなかに、〈大國主神〉一族に籠絡されて高天原に帰ってこなかった何柱かの神がいるが、そのうち最初に派遣されたのが、素戔鳴尊が生んで〈天照大神〉の養子になった五柱の神の二番目の天穗日命である。

この神はのちに〈大國主神〉との関係の深さを買われて、〈大國主神〉を祀る神社の祭祀をつかさどる役目を担うことになった。

つまり国を譲った神とその神を祀る神職の長とが元来姻戚関係でともに大和朝廷と先祖を一つにしているという伝承となっていて、豪族たちを帰順させるさいの大和朝廷の苦心を察することができる。

この天穗日命は出雲臣の祖とされ、のちにイヌモノクニノミヤツコ出雲国イヌモノオミ造イヌモノオミ（島根県知事に相当）になったが、大化改新のあとは、

巨大な出雲大社の神官職となって現在まで続いている。現在じつに八十三代めになるセンゲ千家がそれである。

この出雲の豪族については、もちろん、別の意見もあり、たとえば、元々大和にいた豪族が追われて出雲に逃げて、そこで強国をつくって大和朝廷を悩ませたのだ——と主張する学者もいる。

出雲神話についての幾つかの解釈は〈倭迹迹日百襲姫命〉とも関連するので、第八章で改めて詳述する。

なお、神社のほかにも、この神話に関係すると思われる遺跡や出土品が出雲地方にたくさんある。

とくに、現在の鳥取県の島根寄りの大山町・淀江町の丘陵地帯にひろがる妻木晩田遺跡は、発見された弥生遺跡では最大の集落とされ、面積が百六十ヘクタールにも達し、有名な吉野ヶ里遺跡の四倍もある。一辺が一・五キロと思えばよい。

初期の大和の都にも匹敵する広大さであり、大和朝廷の先祖の強敵が出雲にいたことは明白である。

こういうことから、出雲が但馬と並んで『魏志倭人伝』の投馬（ズマ）国の候補とされることが理解できる。

◎〈饒速日命〉の謎

つぎに補足しておくべきは、〈饒速日命〉である。

第六・三節に記したように、神武天皇は東征に出発するときから、目的地の〈大和〉に先に天降った〈饒速日命〉なる英雄がいることを知っていた。

この神話が史実を伝えているとすれば、出雲地方への再三の討伐軍のほかにも、九州の〈山門〉らしい大和朝廷の祖先の地から直接〈大和〉へ向かった一派がいたことを意味している。

この〈饒速日命〉については『古事記』には簡単にしか書かれておらず、『日本書紀』にもそう詳しくはない。むしろ義兄にあたる長髓彦との争いが、主眼となっている。

しかし、『記紀』よりもすこし後の時代に〈饒速日命〉の子孫——と信じている物部系の人たち——によって書かれたとされる『先代旧事本紀』には、かなり詳細な記述があつて、とうじの人たちの伝承がわかる。

簡単に記すと——

正式の名前は〈天照國照彦天火明櫛玉饒速日命〉で、またの名は天火明命などといい、その父神は天忍穗耳尊とされている。

この尊は、素戔鳴尊が〈天照大神〉の宝玉から生んで〈天照大神〉の御子になった五柱の神の筆頭であり、出雲の神官の長となつた天穗日命の兄にあたる。

そして母神は高皇産靈神の娘の萬幡姫である。

こう書くことややこしいが、これは要するに、〈饒速日命〉とは〈天照大神〉の孫として日向の高千穂の峰に「天孫降臨」した〈瓊瓊杵尊〉の兄弟だ、ということである。

天火明命は、『日本書紀』の一書と『古事記』では瓊瓊杵尊の兄となっているし、『日本書紀』の本文では瓊瓊杵尊の三男となっている。つまり海幸・山幸兄弟の弟である。

さらに、丹後の籠神社に伝わる国宝『勘注系図』でも、瓊瓊杵尊の兄弟とされている。

だから、天孫降臨の瓊瓊杵尊とまったく同格の神なのだ。

こういう高貴の生まれの〈饒速日命〉は、やはり〈天照大神〉や高皇産靈神の仰せによって、二種の鏡・剣・さまざまな玉などからなる「十種の神宝」（またはトクサ

ノカンダカラ)を授けられて、天磐船アマノイワフネにのって河内カワチの国に降臨し、そこから《大和》に進出した。

そして奈良市の鳥見トリミに遷り住み、そこに昔からいた豪族の長髓彦の妹の三炊屋媛ミカシキヤヒメを娶って可美眞手命ウマシマデを生み、《大和》の首領として君臨していた。

つまり、兄の《饒速日命》ニギハヤヒと弟の《瓊瓊杵尊》ニニギが、同時に、片や河内カワチに降臨したのち大和へ進出、片や九州の日向地方ヒムカへ降臨して子孫が日向から大和へと進出——したのだ。

《饒速日命》が最初に降臨したのは丹後地方で河内へはそのあとで遷ったのだという説を記す古文書『勘注系図』もあるが、それについては第九章で述べる)

その兄の所へ、弟の曾孫ヒマゴにあたる神武天皇こと《磐余彦尊》イワレヒコがやってきて、《饒速日命》の義兄にあたる長髓彦と熾烈な戦いを演じたわけで、《饒速日命》の心境は複雑だったろうが、戦況を判断して、長髓彦を排して御子の可美眞手命とともに神武天皇に帰順した。

神武天皇は《饒速日命》やその御子の心根を賞して深く寵愛した。

そして《饒速日命》の直系の子孫は物部氏となって長く大和朝廷に仕えることになった。

◎《饒速日命》の子孫たち

物部一族モノノベが、降臨以来の家臣である大伴一族オオトモと並ぶ古い大和朝廷の重臣となり、おもに軍備や警備を統括し、六世紀になって蘇我一族ソガとの権力闘争に破れるまで権勢を振るったことは、よく知られている。

物部モノノベという名は、武を担当する職業を意味し、その読みは「モノノフ」でもあり、武士を意味する「もののふ」と同義である。

《饒速日命》の子孫を名乗る豪族は物部以外にもいくつもあり、先述した熊野クマノの豪族もそうで、物部にきわめて近い親戚とされている。

また『先代旧事本紀』にくわしい系図ののっている愛知・岐阜を本拠とする尾張一族オワリも《饒速日命》の系統であるとされているし、丹後半島を根城にして日本海側の出口を抑えていた海部氏アムベも、《饒速日命》を祖とする独自の系図を誇りにしている。

瓊瓊杵尊が降臨に際して「三種の神器」^{ジンギ}を授けられたのと同様に、〈饒速日命〉も「十種の神宝」を授けられたという伝承も興味ぶかいが、これはいったん神武天皇に献上され、のちに返却されて、物部一族の本拠で武器庫の役目も果たしていたとされる現天理市の〈石上神宮〉^{イソノカミ}に、先の靈劍「布都御魂」^{フツノミタマ}と並んで奉納されて祭神となった。

〈石上神宮〉には、素戔鳴尊^{スサノオ}が八岐大蛇^{ヤマタノオロチ}を斬ったときに使った剣も奉祀されている。また「十種の神宝」のなかにも剣がある。つまりこの神宮には、「草薙剣」以外の神話における著名な剣がすべて奉祀されているのだ。大豪族・物部の権勢を物語っている。

いずれにせよ、九州のある地域（たとえば山門）にいた大和朝廷の遠い先祖が、九州の日向に進出したり、山陽山陰に進出したり、大和に進出したり、幾度にもわたって様々な形で拡散したことがうかがわれる。

昔から指摘されていることだが、『記紀』の神代史のなかに「雪」がほとんど出てこないことも、大和朝廷の九州起源を連想させる。

まったく無いわけではないのだが、「あわゆきのような

胸」とか「あわゆきの如く蹴散らし」といった表現が二、三箇所あるのみなのだ。

もちろん神話には各氏族の名誉を保つための後世の付会もあるだろうが、古い神社の伝承などとも考え合わせると、史実の反映もまた多く見られるように思われる。

とくに九州から畿内に進出したらしい〈饒速日命〉一族については、史実の可能性が高いようである。

〈天照大神〉^{アマテラスオオミカミ}を祀る神社が数多くあるように、〈饒速日命〉^{ニギハヤヒ}を祀る神社もまた多数ある。むしろこのほうが多いくらいなのである。

◎「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説」の確からしさ

さて、

「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説」

——の確からしさについて、著者なりの結論を述べてみよう。

「邪馬台国」^{ヤマトイコク}九州説」

と、

「卑彌呼」Ⅱ「天照大神」説

——とを結びつけ、ついでその《邪馬台国》またはその後継一族が東征して現在の天皇家の先祖になった——という説は、ほんとうにロマンにあふれており、なかなかの説得力がある。

《邪馬台国》が九州だという説も、距離を大幅に縮めて解釈すれば『魏志倭人伝』のとおりである。

《天照大神》の本名である大日靈女貴や天照大日靈女尊オホヒルメノミコチ アマテラスオホヒルメノミコトにしても、ヒミコ、ヒメコ、ピミコ・・・などと読めて、

《卑彌呼》と共通している。

さらに「皆既日蝕」の件も迫力がある。

この説を踏み台にしたSF的な小説がたくさん書かれていることは、この説が日本人の心に響くものを持っているからであろう。

しかし、なんといっても考古学的な証拠に乏しいことが欠点である。

何人かの学者が九州の何力所かの候補地を探訪して、ここに都をつくるのは困難だと直観した——と述べている。

また、《邪馬台国》ヤマトイコクの場所が一箇所限定されず、人によつてまちまちな意見が出されていることもいまいち信じがたい理由である。

「大和説」の場合には、多くの説のほとんどが現在の狭い意味での《大和》の地になるのだが、「九州説」では、まちまちなのである。

さらに、東征の結果が神武天皇なのか崇神天皇なのかあるいは《神功皇后》ジングウなのか、はたまた應神天皇_{スジン}なのかも、論ずる人によつてまちまちである。

それから大もとに戻つて、図4・3のような古い地図から考えた『魏志倭人伝』キシワジンデンの解釈とも、結びつきにくいものである。

日蝕の問題にしても、よほどの晴天でないと、その効果は意外に薄いのではないかと、考えられる。

ちよつと天気が変だな——というていどで過ぎてしまふかもしれない。

《卑彌呼》ヒミコの時代以後にも日蝕は何回もあつたのだが、それで大騒乱が生じたという伝承は『記紀』には見られない。

また『魏志倭人伝』の《卑彌呼》の死のところにも、天体変異の話はまったく無い。

したがって著者としては、この説はロマンとしては面白いし、われわれの想像をかき立ててくれるものではあるが、今後そのような考古学的証拠（科学的証拠）が出てこないと、にわかには信じがたい——と考えている。

吉野ヶ里遺跡や鏡の発掘でいどでは、大和にも同種のものがたくさんあるから、それだけでは科学的根拠にはならないであろう。

《大和》をはるかに上まわる新たな考古学的発見のみが、このロマンにあふれた説を支持するであろう。

＊

もちろん、間接的な関係は、あってもおかしくない。

両者が別の事象だったとしても、伝説ができる過程で影響しあったことは、じゅうぶんに考えられるからである。